

# ミルクティー



甘くて 温かくて キモチが落ち着く  
そんな 恋愛が したかった

平田真子

私、朝田 桃（アサダ 桃）。  
栄星音楽大学附属高校の3年。

私の目指す栄星音楽大学は、日本の音大では一応トップと言われていて、  
いくら内部の高校生でもエスカレーターで進学できる、  
という甘いものではなく、厳しい試験をパスしないとイケない。

「おはよー！桃！」

校門の前で親友が叫んでいる。

「あ、おはよー！小夏。」

「今日の進路相談、お母さん来てくれるんでしょう？」

「そうそう。あたしも一応附属の大学を希望してるけど、成績がねえ。小夏は余裕だよね！」

一緒に喋っているのは親友の佐倉小夏。  
ピアノの実技はもちろん、なんと他学科も学年トップの才女。

でもそんなこと鼻に掛けないし、ちょっと天然で変わってるところが大好き。

音大附属高校だけに、授業は普通学科の他に、  
声楽や、音楽史、ドイツ語まである。

高校生はそれぞれ自分の「専攻」を決めていて、  
授業に加え、放課後にその専攻のレッスンを受けている。

私と小夏の専攻はピアノ。

「それでは、今日の授業はこれで終わります。この後進路相談の予定になっている生徒は保護者の方と一緒に、進路相談室まで来るように。」

担任が言う。

みんなバラバラと教室を出て行ったり、  
レッスンに向かったりしている。

「あ、いたいた、桃！」

振り返ると母がそこにいた。

「ちょっと、声大きいし...」

「いいじゃない、さ、進路相談に行きましょう。」

「なんかお母さん楽しそうじゃない？」

「だって懐かしいもの〜」あ！この教室！変わってないわあ...」

そう、母もこの高校の卒業生。

そして、栄聖音楽大学に進み、結構良い成績をとっていたらしいんだけど、  
数ある楽団からのスカウトを断り、なぜか地元中学の音楽の先生をしている。

「失礼します、朝田です。」

「どうぞ、お掛け下さい。」

担任が言う。

「朝田さんは栄星の大学に進学希望ですね？」

「そ、そうです...」

「そうね、このまま頑張れば入ることができるでしょう。でも、気を抜かないように。試験は厳しいわよ。履修曲届を来週までに提出するように。」

「は、はい！ありがとうございます！」

その後、この間のテストの話や、受験に関する説明を母と一緒に受けて、進路相談は無事終了。

先に進路相談を終えていた小夏が廊下にいた。

「桃、どうだった？」

「うん、なんとか大丈夫そう。」

「そっか～、よかったじゃん。」

「小夏はもちろん進学には問題ないんでしょう？」

「あ...うん、そうだね。」

ん？なんだか小夏、変？

「どうしたの？小夏、何かあったの？」

「あー、うん。今日はちょっと用事があるから、今度ゆっくり話すね。」

「あ、そう？わかった。」

小夏、どうしたんだろう？

数日後、小夏から話があるとされた。

私は、自分の家の近くにある"TAICHI's cafe"に小夏を連れていった。

「あ、桃ちゃんいらっしゃい。小夏ちゃん、久しぶりだね。」

このカフェのマスター太一さんと、奥さんのより子さんには小さい頃からお世話になっている。

いつものミルクティーを注文して、

「話って？」

と切り出してみた。

「あ、うん。進路のこと。」

「そんな気はしてたけど...どうしたの？小夏なら問題なく進学できるでしょう？」

小夏はしばらくの沈黙の後、一気に話を始めた。

「私ね、留学することにしたの。オーストリアのウィーンにある、オルヒデーエ音楽大学って知ってるでしょう？そこのピアノ科にね、希望を出していたの。先生が推薦状を書いてくれて、審査も色々あったんだけど、どうにかパスできて。でね、今度最終テストが向こうであるから、受けてくるの。この日の為にドイツ語も習っててね...で、」

「すごいじゃん—————！！！」

私は我慢できずに叫んでしまった。

「すごいすごい！オルヒデーエ！？ってあの！？世界の才能ある音楽家の卵が集まるっていうあのオルヒデーエ！？全然知らなかった！何も言ってくれないんだもん！！」

「うん、ごめんね。なんだか言い出しにくくて。中学からずっと一緒だったし...」

「そんなこと！私の親友がオルヒデーエに行くなんて、すごい事だよ～！！」

「あ、でもまだ最終テストが残ってるしね。」

「小夏なら絶対通るよ！私応援してるからね！！」

「ありがとう、それでね...」

「ん？まだ何かあるの？」

「その前にSHUのオーディションを受けたいの。」

「へ？しゅー??」

私は何の事か咄嗟にはわからず、素っ頓狂な声を出してしまった。

「歌手のSHU。」

歌手、SHU（シュウ）。

今、若い女の子に人気の男性ミュージシャンだ。

小夏がSHUのファンだとは、前から知っていたけど...

「SHUのオーディションって？」

小夏が少し赤くなってボソボソ言った。

「SHUが1曲だけの限定企画で、バックバンドを一般から募集してるの。ピアノの枠もひとつだけあって...」

「それを受けたい、と？」

さらに赤くなった小夏が

「うん...」

そして

「ウィーンに行く前に、どうしても受けたいの。もう、申込用紙も送ったの。桃、ついて来て!!!」

「は!？」



小夏はピアノの才能もすごくあるし、他の勉強もできる。  
でも、こういう突飛もない事をたまに言い出して、びっくりさせられる事がある。  
これも小夏の魅力なんだけど…

「まったく、ウィーンに行くって言いだしたり、SHUのオーディションを受けるって言ったり。  
小夏には驚かされてばかりだよ。」

「で、ついて来てくれる？」

「いいけど、いつなの？私がついて行ってもいいのかな？」

小夏がモジモジして言った。

「うん、譜めくりとかで1人まで連れてきていいことになってるの。でね、急なんだけど今週末…  
」

ほんとに急だわ。

小夏のオーディションまでの数日間、私は父の事を思い出していた。

というのも、私の父は小夏が留学しようとしているオルヒデーエ音楽大学の卒業生なのだ。バイオリニストとして、世界中を飛び回っている。

オルヒデーエとはドイツ語で「蘭」の意味で、オルヒデーエ音楽大学の紋章は蘭だった。

父が蘭の紋章が付いている卒業記念の万年筆を使っているのを何回か見た事がある。

私の父の記憶は小学校まで。

それも、ほとんど家にいなかったから、思い出も少ない。

父と母が離婚したのは私が小学校6年生の時。

離婚間際の両親は、たまに会えば喧嘩ばかりして、私は4歳年下の弟と自分の部屋に閉じこもりがちだった。

両親の離婚が成立した時には、少しホッとしたのを覚えている。

それから、母は女手ひとつで私と弟を私立の中学・高校に進学させてくれたし、何ひとつ不自由な生活をさせてくれている。

いつも笑顔で、強い母には本当に感謝しているし、私の目標でもある。

父の事はたまに思い出す程度になってしまっていた...

オーディションの日は雨だった。

「小夏、緊張してない？」

「あ、うん...ダ、ダイジョーブ...」

傘を広げたまま会場に入ろうとする小夏は、ちょっと顔が青ざめていた。

「あんまり大丈夫そうじゃないけど？普通の試験では全然緊張しない人なのにね？やっぱり憧れのSHUの前に出るとなると、そうはいかないのかな。」

私は努めて明るく振る舞った。

オーディション会場は、テレビドラマの撮影なども行われるスタジオの一室で、テレビでよく見る女優さんなどとも廊下ですれ違ったりした。

「ほら、見て見て、女優の春山あすかだよ！きれいだねえ...細いねえ...」

小夏はあまり聞こえていない様子だったけどね。

「では、次、佐倉小夏さん、中にお入り下さい。」

係りの人が小夏を呼びにきた。

「へい！」

「ぶはっっ！！小夏、『へい！』はないでしょ、『へい！』は...どんだけ緊張してんの。」

「ははは...桃、譜めぐりお願いね...ははは...」

小夏、演奏できるんだろうか。

譜めくりとは、演奏者の横に座ってタイミング良く楽譜のページをめくっていく人の事。  
私は小夏にその役割をお願いされたわけ。

オーディション会場に入ると、部屋の真ん中にグランドピアノが置いてあって、その向こうに審査員の面々が見えた。

その中のひとりに、SHUを見つけた。

小夏の顔が赤くなっている。

審査員のひとりが小夏に声を掛けた。

「えーと、佐倉小夏さん。希望はピアノですね？」

「は、はい。栄星高校3年のサ...佐倉小夏です。よろしくオネガイシマス...」

「緊張してるね？リラックス、リラックス。では、どうぞ、自分のタイミングで始めてね。」

小夏がピアノの前に座る。  
私も横に置かれたパイプ椅子に座った。

小夏が目を閉じた。  
一度深呼吸をして、再び目を開けた小夏は、さっきまでの緊張した顔はどこかへ吹き飛び、いつもの小夏に戻っていた。

小夏が演奏を始めると、部屋の空気が変わった。

審査員の表情にもそれが表れている。

(私...やっぱり小夏のピアノが好きだな。)

妖精が踊っているような指運び、流れるような美しいメロディー、小夏のピアノは技術の高さだけでなく、  
聞いている人を幸せな気持ちにさせる不思議な力を持っている。

演奏が終わっても、審査員はしばらく黙ったままだった。

「お...終わりました...」

小夏の声で審査員が我に返ったように

「佐倉さん！素晴らしい演奏だったよ！！なんていうか、ありきたりの言い方だけど感動した！！SHU、どう思う？」

審査員がSHUに話を振った。

SHUは

「佐倉小夏さん、合格ね。よろしく。」

とだけ言って、小夏に笑顔を向けていた。

小夏は失神寸前の顔でSHUを見つめ返していた。

控え室で少し待つように言われたので、嬉しくて大泣きの小夏と一緒に待っていた。

「小夏、私何か飲み物買ってくるから、ね？」

「う...うん。ひっく...、ありがとう...ひっく...」

廊下に出てはみたものの、初めてきたスタジオは迷路のようで、どこに自動販売機があるのか全然わからなかった。

「こっちかな?...あっ！ごめんなさい！！」

きょろきょろしながら歩いていたら、人にぶつかってしまった。

「ごめんね、大丈夫？小銭落ちたよ。」

「大丈夫です！本当にすみません！！」

顔を上げて相手を見ると、最近テレビによく出ているお笑いコンビのひとりだった。

「あっ！テレビに出ている方ですよ！確か、『ミドコロ』のヒカルさん！」

「ここは撮影スタジオだからなあ。通る人はたいがいテレビに出てる人だよ。」

ヒカルがおかしそうに笑うので、私はなんだか急に恥ずかしくなっちゃって

「あはは、そっか～。ごめんなさい、こういう場所初めてで舞い上がっちゃって。」

と言いつつ謝した。

そんな事は気にしない様子でヒカルは

「それよりまだ小銭が落ちてるよ。」

と言った。

「ほんとだ。えっと、小夏は緑茶で...私はミルクティー...と、あっ、ミルクティー売り切れだ...」

「俺が買ったのが最後だったんだ。いいよ、これあげる。出会った記念に。」

ヒカルがミルクティーを差し出した。

「えっ、でもっ...」

「俺、可愛い子には優しいんだ。」

私の手にミルクティーを押し付けてヒカルは行ってしまった。



オーディションから1ヶ月程経った。

SHUの新曲のレコーディングは順調に進んでいるようだった。

なんと、オーディションに合格したのは小夏だけで、  
小夏以外はプロのバンドが演奏しているのだとか。

「桃～、今日もねスタジオでレコーディングなの。1曲だからすぐ終わるのかと思ったけど、なかなか時間かけるんだよ～。」

そんな事を言いながらも小夏は嬉しそうだった。

「留学の方は話進んでるの？」

「うん、SHUの方が終わったらすぐにウィーンに発つ。あっちでレッスンを少し受けてからテストを受けるの。」

「そっか。応援してるからね。がんばってね。」

「ありがとう」それよりさ、オーディションの日にミドコロのヒカルに会ったんでしょ？私あの時は泣いててよく話聞いてなかったんだけど...」

小夏は結構ミーハーな所がある。

「うん、ミルクティーが売り切れて困ってたら自分が買ったのをくれたんだよね。」

「へ～！優しいじゃん！」

「でもね、なんか女好き～って感じだったよ。」

「結構男前だからね～。噂も色々聞くもんね。」

小夏は、ヒカルがアイドルの誰と噂があるとか、週刊誌にスクープが載っていたとか、色々話してくれた。

「じゃ、私これからレッスンだから、ばいば〜い！」

小夏はひとしきり話し終わると、さっさと行ってしまった。

学校の帰り道、最寄の駅から自宅までの帰宅途中に大きな公園がある。  
緑が多く、人も少ないので、桃は公園のベンチに座って楽譜を読んだりするのが好きだった。

「あれ、今日は先客がいるんだ...」

いつものベンチに向かうと一人の男性が座って空を見上げていた。

男性は、切なく、今にも泣いてしまうんじゃないかという表情をしていた。

桃はその顔に見覚えがあった。

「ヒカルさん...？」

男性がこちらを向く。

「あれ？この間のミルクティーの彼女？」

ヒカルはテレビで見る表情に戻っていた。

「偶然ですね！こんな所でまたお会いするなんて！私の事覚えててくれたんですか？」

「女の子の顔は忘れないよ。女子高生だったんだ。スタジオで会った時は私服だったから。」

「あ、そうなんです。栄星の3年で...ヒカルさんこそ、こんなところで何してたんですか？」

「俺はね、可愛い子来ないかなーって待ってたら、君が来た。」

ヒカルがニコニコしながら言う。

この人は根っからのプレイボーイだな、と桃は思いながら、

「あ、そうですか。」

とちょっと冷たく反応してしまった。

ヒカルはそんな事は気にしない感じで質問してきた。

「この間は どうしてあのスタジオにいたの？」

「友達が歌手のSHUのバックバンドのオーディションを受けるって言うからついて行ったんです。」

「SHU？あいつの？へー、そんな企画があったんだ。」

「SHUさんとお友達なんですか？」

「うん。俺とあいつは昔から友人なんだ。で、お友達のオーディションの結果はどうだったのかな？」

「それが、合格したんです！！私も嬉しくって。」

「へー！すごいじゃない。お友達も栄星高校？」

「はい。」

「2人とも音楽やってる子なんだね。」

「友達はピアノの才能もすごくあって、私なんかとは比べ物にならないくらいの成績だし...」

「自分の事、そんな風に言うもんじゃないよ。君だって、えーと、名前聞いてなかったよね？」

「あ、桃です。朝田桃。」

「桃ちゃんね。じゃあ、はい、これ。」

ヒカルが紙切れを渡してきた。

「なんですか、これ。」

「今日再開した記念に。じゃあ、俺これから仕事だから。またね、桃ちゃん。」

そう言うと、ヒカルは走って行ってしまった。

紙切れには携帯番号とアドレスが書かれていた。

「あの人はいつもこれを持ち歩いてるんだろうか...」

それにしても、最初見た時には泣きそうな顔をしていたけど...

「気のせいかな？」

桃は独り言を言ってそれまでヒカルが座っていたベンチに腰をおろし、次の練習曲のページをめくった。

翌日学校で、小夏に公園での出来事を話した。

「えー！じゃあ、SHUとヒカルって友達なんだ！」

小夏が驚いたという表情で言った。

「同級生だって言ってたよ。」

「以外～。でも、あの公園にヒカルがいるなんてね。」

桃は、ヒカルの携帯アドレスを渡された事は、小夏には話していなかった。

「私ね、明日のレコーディングで最後なんだあ。」

小夏が少しさみしそうに言った。

「たった1曲だけど、憧れのSHUと共演できるなんて夢にも思ってなかったし...」

「そうだね。私、発売されたら絶対買うからね！」

「ありがとう。でね、来週ウィーンにテストを受けに行くの。オルヒデーエ音大のね。」

「あ、もうそんな時期なんだ。大丈夫、絶対合格するって！私が保証する！！」

「うん、がんばるね。」

桃も小夏の心配ばかりしている場合ではなかった。

栄星大学の内部試験が近づいていたのだ。

試験は2日間にわたって行われ、専攻のピアノ、ソルフェージュ、音楽理論などの他に、英語や小論文などもあった。

この所、家へ帰っても自分の勉強机に向かう事が多くなり、ピアノの課題曲の練習にも力が入っていた。

一息入れようと、ピアノの前から立とうとすると、楽譜の間から紙切れが床に落ちた。

「あ...ヒカルさんの...メアド...」

桃は少し考えてからヒカルにメールしてみた。

ー 来週から大学に入るための試験があるんです。  
毎日ピアノを練習したり、英単語を覚えたり。  
ミルクティーでも飲んで、一息入れます。

朝田 桃 ー

送信してみて、桃は少し後悔した。

ヒカルがどういうつもりで連絡先を渡したのかわからなかったが、こんな内容のメールをもらっても困るだろうと思ったのだ。

(ヒカルさんはそこまで深く考えてないよね。きっと他の女の人にもこんな感じなんだろうし。それに、返信が来るとも限らないし。)

そう心の中で自分に言い、ミルクティーを淹れにキッチンへ下りた。

TAICHI's cafeのカウンターで桃はボーっとテレビを眺めていた。

「桃ちゃん、何かあったの？」

マスターの奥さんのより子さんが心配そうに顔を覗く。

「あっ、ううん、ちょっと勉強疲れかな？」

「そっか、もうすぐ試験だものね。がんばってね。あ、いらっしやいませ〜。」

そう言うと、より子さんは今来たお客さんの方へ行ってしまった。

桃は試験とは別の事を考えていた。

昨日、なんとなくヒカルに送ったメールに返信がきたのだ。

ー 桃ちゃん

試験はいつまでかな？終わったらご褒美に遊び に行こうよ。  
秋だから紅葉のきれいな所がいいかな？

ヒカル ー

アドレスが本物だった事にも、返信が来た事にも、ヒカルに誘われてしまった事にも桃は驚いていた。

「遊びに行こうよって...なんて返事すればいいのよ...」

桃は返信できずにいたのだ。

なんとなく見ていたテレビの番組が変わり、画面の中にヒカルが出てきて桃は思わず声をあげてしまった。



「ヒカルさん...！」

「何？桃ちゃんファンなの？お笑いだけど男前だもんね？桃ちゃんはこういうのがいいのか～。」

いつの間にかそこにいたマスターがからかうように言った。

「ち...違うもん！」

桃はそう言いつつも画面から目を離せないでいた。

(とりあえず試験が終わる日だけ連絡してみようかな...)

栄星の内部試験が始まる前日、小夏がウィーンから帰ってきた。

「小夏！どうだった！？試験は？」

「うん！出来るだけの事はしたよ！あとは結果を待つのみ。」

そういうと小夏は笑った。

桃は自分の事のように嬉しくなり、

「小夏はきっと大丈夫！絶対合格してるって！私も頑張るからね。」

と言った。

桃は最後のあがきで練習室にこもった。

練習室は生徒なら誰でも借りることができる防音室だ。

部屋には、ピアノが1台あり、狭い事が逆に集中力を高める。

「やっぱりバッハの平均律は苦手だな……」

桃は独り言を言ってまた練習を始めた。

専攻のピアノは、バッハ平均律から1曲と、任意のソナタ、更に好きな作曲家の曲から1曲を選び、15分程度のプログラムを弾くことになっていた。

桃はモーツァルトのソナタKV.333番と、シューマンのピアノソナタop.22番を選曲していた。

その日遅くまで桃は練習室でピアノに向かった。

試験当日。

桃は少し寝不足だった。

初日から専攻の試験がある。

楽譜を抱きしめるようにして試験会場となる学校内の音楽堂に向かった。

ピアノの試験は、他の受験生も客席に座っている状態で演奏する。

ちょっとしたコンサートのようだ。

もちろん受験生にそんな余裕はないのだけど...

「では、これから内部試験を開始します。名前を呼ばれたら舞台上昇って演奏を開始して下さい。」

桃は2番目だった。

最初の生徒の演奏が終わり、緊張して席で待っていた。

「では、次、朝田さん。」

「はい。」

桃は深呼吸をして舞台上昇った。

舞台上昇ると、なぜか桃はヒカルからのメールを思い出していた。

桃が試験終了の日を教えるメールを送った夜、ヒカルから返信がきていたのだ。

— わかりました。

じゃあ、試験が終わった翌日の日曜日、

あの公園のベンチで会いましょう。

行き先は決めてあるからね。

試験頑張る。いつもの調子でね。

ヒカルー

どうして大事な試験の前にヒカルからのメールを思い出したのかわからなかったが、不思議と落ち着いて演奏できた。

翌日の筆記試験・面接も無事に済み、桃はやっと肩から重い物が降りるのを感じた。

試験が終わり、下校した桃は小夏の家へ向かった。

玄関に出た小夏は少し驚いたように、

「桃、どうしたの！？試験、どうだったの？」

と聞いた。

「うん、試験はね、何とか大丈夫だと思うよ。そうじゃなくてね、あのね...」

少し考えてから、

「実は明日ヒカルさんと会くの！」

「えー！」

桃はこれまでのメールの内容を話した。

「それってデートじゃないの！？」

小夏が言う。

「んー、でもヒカルさんってプレイボーイな所があるじゃない？あまり深い意味はなく誘われた感じがするんだけど...」

「でも行くんでしょう？」

「うん...すごく迷ったんだけどね。」

「桃、気に入られたんじゃない？いくら何でも普通の女子高生にまで声かけないでしょう？ヒカルさんお笑いとは言え、カッコいいし、モテると思うよ？」

「そ...そうかな...」

桃は曖昧な返事をした。そして、

「とにかく、行ってみる。帰ってきたらまたメールするからね。」

と言って、小夏の家を出た。

桃は明け方まで眠れなかった。  
そして、そのまま約束の時間になってしまった。

「ひどい顔...かも...」

冷たい水で顔を洗い、桃は着替えをした。

「やっぱりワンピース？ブーツだと歩きにくい？一体どこに行くのかな...」

独り言を言って桃は身支度をした。

「桃～？出かけるの～？」

母がまだパジャマのまま聞く。

「あ、うん...ちょっと小夏と出掛けてくる！」

「あやし～。姉ちゃんデートじゃねーの？」

弟の樹（イツキ）がニヤニヤしながら言ってくる。

「ガ...ガキのくせに生意気な事言わないでよね。」

樹は栄星音大附属中学の2年生。高校ではバイオリンを専攻するつもりらしい。  
中学ではまだ専攻はなく、音楽全般を学んでいる。

「桃、あんまり遅くならないようにね。気を付けて行ってらっしゃい。」

母が玄関まで見送りしてくれた。

お母さん、嘘ついでごめんね...



公園の手前で桃は慌てて足を止めた。

(こんなに息を切らして行ったらおかしいよね...)

桃は無意識に自宅から走って来ていたのだ。

少し呼吸を整えて、公園に入った。

(もしかしたら、来てないかもしれないし。)

そんな事を考えながら約束の場所まで行くと、ヒカルはもうそこに来ていた。

「おはよう、桃ちゃん。」

「お、おはようございます！お待たせしてすみません。」

「ううん、俺も今来たところだよ。ワンピース可愛いね。」

「あ、ありがとうございます...ヒカルさんも今日はメガネなんですね。雰囲気違いますね。」

「一応ね、変装のつもり。でも、普段は俺あんまりバレないんだ。芸能人オーラゼロなのかなあ？」

「そんな事ないと思いますけど...」

「そう？じゃあ、いこっか」

どこに行くんですか、と聞く間もなくヒカルは歩きだした。

「こっちに車停めてあるから。さ、乗って。」

言われるがままに助手席に乗り込み、シートベルトを締めた。

そのまま黙っているとヒカルが、

「はい、ミルクティー。これ好きなんだよね？」

と温かいミルクティーの缶を差し出した。

「あ、すみません。」

「今日は来てくれてありがとう。来ないかと思ったよ。急だったしね。試験はどうだった？うまくいった？」

「あ、はい、何とか無事に終わりました。で、今日は…」

どこに行くんですか、と言おうと思ったら、

「紅葉が綺麗な所に案内するよ♪無事に試験を終えた桃ちゃんへプレゼント。」

とヒカルが先に言った。

車の中で他愛もない話をしているうちに、桃はだんだんと緊張が解けていくのを感じた。

ヒカルがただのプレイボーイで、女性と話すのに慣れていただけだと思っていたのだが、ヒカルの話し方に不思議と安心感を覚える事に気がついた。

学校の話、友人の話、家族の話。

気がつけば、桃は自分の事ばかり話していた。

しばらく走ってヒカルが駐車場に車を停めた。

「ここからは少し歩こう。」

前を歩くヒカルについて行く。

(意外と背が高いんだな...)

その場所には、桃は来た事がなかった。

落ち着いた雰囲気のある街並みで、日曜だというのに、人があまりいなかった。

少し歩いた所でヒカルは公園のような場所に入って行った。

長い階段を上り、小高い丘の上に出る。

「ほら、こっち。見てごらん。」

言われた方向を見下ろすと、そこは一面の赤いじゅうたんのようだった。

桃は思わず声をあげてしまった。

「すごい、綺麗！！じゅうたんみたい！」

「紅葉を上から見るともいいでしょう？」

「ほんと、きれい...」

桃は感動して、なんども「きれい」とつぶやいていた。

ふと我にかえってヒカルの方を見ると、何故か少し悲しそうな顔をしている。

「ヒカルさん...？」

その時桃は、ヒカルの後方にある木陰に人の影を見た気がした。

「あれ？誰かいたような...」

「ここは紅葉がとても綺麗だし、散歩の人なんじゃないかな。あ、そろそろお昼だね、どこかランチに行こう。」

「あ、もうそんな時間ですか？」

木陰に桃が見た人影は、もうどこかに消えていた。

二人はこじんまりとした洋食レストランに入った。  
店には老夫婦の客が一组と、気のよさそうなマスターがいるだけだった。

「桃ちゃん、好きな物頼んでね。」

桃はカルボナーラと紅茶を注文した。

「桃ちゃんは本当にミルクティーが好きなんだなあ。俺は...ポテトグラタンとハンバーグね。」

「グラタンとハンバーグ？」

桃はなんだかおかしくなって笑ってしまった。

「子供みたいだって言いたいんだろ。」

「あ、ごめんなさい。なんだか可愛い注文だな、って思ってた。」

ヒカルはやはり、とても温かい話し方をする人で、桃はヒカルが芸能人だという事をすっかり忘れて、夢中で会話をしていた。

「おいしそうに食べるね。」

「だって、すごくおいしくて。」

ヒカルがニコニコしながら桃を見ている。

ちょっと恥ずかしくなって、

「もう、女の子が食べてるところをそんなにジロジロ見ないで下さいよ〜」

と言った。

「だって、あんまり可愛いからさあ。...ねえ、桃ちゃん。」

「...はい？なんですか？」

可愛いと言われた事に照れるのを隠しながら桃は答えた。

「また、誘ってもいいかな。」

ヒカルが少し真面目な顔で言った。

「え...私を？」

「うん。」

桃は自分の顔が赤くなるのがわかった。

胸がドキドキする。

なんて返事をしたらいいのかわからなくて、少し黙ってしまった。

「迷惑かな？」

「いえ、迷惑だなんて思ってないです！ちょっとビックリして...だってヒカルさん、有名な人だし、私なんて高校生のガキで...」

「桃ちゃんがいいんだけどな。」

ヒカルの言葉に、桃はもう、それ以上何も言えなかった。

顔は赤くなる一方だ。

桃は訳がわからなかった。

芸能人のヒカル、そのヒカルとこうしてランチをしている。  
しかも、私の事をまた誘うと言ってる...

からかっている？遊び？

「困らせるつもりじゃないんだよ。無理にとは言わないしね。さ、食べ終わったらこの辺りを少しドライブしよう。この辺は街並みがすごく綺麗なんだ。」

レストランを出て、車に乗り込む。

「ヒカルさんはこの辺りに詳しいんですね。」

「ああ、こっちに出てきた頃に住んでたんだよ。」

とだけ言って、ヒカルは車を走らせた。

確かに、そこはとても綺麗な街だった。

紅葉の並木道、お洒落な小物を扱うお店、雰囲気の良いカフェ...

時々車から降りて、街を歩く。

「あ、これ可愛い」

桃はある雑貨店で、キラキラした音符の飾りが付いた携帯ストラップを見つけた。

「気に入ったの？貸して」

というと、ヒカルはそれを持ってレジへ行った。

「え！？でも…」

「いいから、いいから。それにもう、家に帰さないといけないな。」

気がつけば、もう日が暮れかけていた。

「あ、じゃあ、待ち合わせをした公園までお願いします…」

「家の前まで行くよ？」

「あ、あ、いいんですっ、あの公園までお願いします！」

「そう？じゃあ、そうするけど。」

公園までの車中、桃は何も話さなかった。

ヒカルもまた、無言だった。

公園に着くと、ヒカルが助手席のドアを開てくれた。



「今日は、ご馳走様でした。それに、このストラップ...大事にします。」

「うん、どういたしまして。楽しかったよ。また、メールしてもいい？」

「はいっ...」

桃はまた顔を赤くしてそう答えると、朝の倍くらいの速さで自宅まで走って帰った。

それから1週間、桃は試験休みだった。

まだ結果が出ていないにもかかわらず、試験が終わった安心感からか、ヒカルの事があるからか、桃はぼーっとする時間が多かった。

その日も桃はTAICHI's cafeでミルクティーを飲みながらぼーっとテレビを見ていた。

バラエティー番組にヒカルが映る。  
二人で会った時とは別人のような、コメディアンのヒカルだ。

「同一人物なんだよね...」

桃はそうつぶやくと携帯を開いた。  
ヒカルとのメールは続いていた。なんてことのない、普通の内容だ。

— 試験休みが終わるので、明日から学校です。  
明日は合格発表。一人ずつ担任の先生に呼ばれて  
結果を聞きます。ちょっと緊張。 —

— 大丈夫、きっと受かってるよ♪  
俺が保証する♪ —

そうヒカルに言われると、なんだか安心できた。  
根拠はないのだけど...

桃の携帯には音符モチーフのストラップがキラキラ揺れている。

「桃ちゃん、お父さんの事聞いた？」

マスターの太ーさんに急に話しかけられて、桃は驚いた。

「お、お父さんって？」

「やっぱり聞いてないんだな、桃ちゃんのお父さん今度の日本公演で、しばらく帰国するんだよ。」

「え、そうなの!？」

子供のいないマスターの太一さんは、桃の両親が離婚後、桃や弟の樹をととても可愛がってくれた。  
奥さんのより子さんも、桃の母が仕事で遅くなる日は、夕飯を食べさせてくれたし、運動会の応援にも夫婦で来てくれたりしていた。

「お母さんは知ってるはずだよ。」

マスターに手渡されたパンフレットには、父の写真と、公演の日程が書かれていた。

「お父さん...」

桃の記憶にある父より、少し老けた顔がそこにあった。  
母との離婚後は、桃は一度も父に会っていない。

「桃ちゃん、その演奏会に行ってみたら？」

「え...でも...」

「ずっと会ってないんだろう？お母さんだってきっと賛成してくれると思うよ。あれから時間もかなり経っているんだし、桃ちゃんの実のお父さんじゃないか。」

（お母さんは何て言うだろう...）

桃は考えた。

世界中を演奏旅行している父だから、時間的にも無理だったのかもしれないが、なんとなく母に気を遣って、桃も樹も父に会いたいとは一度も言わなかった。

桃の本心としては、父に会いたかった。

正直、あまり記憶にない父だが、私の父がどういう人なのか、どんな人生を送ってきたのか、そして今は桃や樹の事をどう思っているのか、何でも良いから知りたかった。

「お母さんに聞いてごらん。」

マスターに言われて、桃は太一のカフェを出た。

帰宅すると、母が夕食の支度をしていた。

「あ、桃！どこいったの。ちょっと手伝ってよ。」

「うん、マスターのそこ。」

桃は手を洗いながら答えた。

「太一さんの所？」

「うん...。」

桃は父のコンサートの事を母に何と言おうか悩んでいた。

すると母が、包丁の音を立てながら言った。

「お父さんの事聞いたのね？」

「...！」

「しばらく帰国するって太一さんに聞いたんでしょう？」

母の方に顔を向けると、母は笑顔だった。

「うん、今度の公演で日本に帰国するんだってね。」

「行きたいの？」

「...」

「いいのよ、行って。あなたがお父さんに会いたいと言うなら、お母さんは何も言わないわ。だって、あなたと樹にとっては、今でもお父さんだものね。」

桃は少し考えてから言った。

「私、お父さんに会いたい。会って話がしたい。」

「チケットを取っておくわ。樹と2人分。」

「俺が何だって？」

自分の部屋から出てきた樹が言った。

「お父さんに会うのよ。」

「は！？親父！？」

「今度の日本公演であなた達のお父さんが帰国するの。お姉ちゃんと一緒にコンサートを見に行  
ってらっしゃい。」

樹は黙っていた。

「お父さんに会いたくないの？」

桃が聞いた。

「会いたい、会いたくないとかじゃなくて...俺、あんまり覚えてないし...」

桃でさえ、あまり記憶のない父だ。  
樹がそういうのも無理はないと思った。

しかし、しばらく考えた樹が、

「俺、行くよ！高校はバイオリン科を狙ってるんだ。親父の演奏を聴いてみたい。」

そう言った。

「そう、わかったわ。チケットが取れたらお姉ちゃんに渡しておくから。」

母はそう言うと、またキッチンに戻った。

翌日、桃は朝日で目が覚めた。

「今日は発表か...」

桃は少し緊張して登校した。

その日の授業はあまり身に入らなかった。

親友の小夏が「大丈夫だよ」とか「きっと合格だって」とか励まし続けてくれていたけれど、やっぱり緊張は解けなかった。

放課後、内部試験を受けた生徒だけが教室に残る。

オルヒデーエを受験した小夏は、再度「大丈夫だよ、メール待ってるね。」と言い残して下校した。

「これから、一人ずつ別室に呼びます。合否の連絡はそこです。合格した人には書類を渡しますから、保護者の方に今日中に確認してもらって下さい。残念ながら不合格の人は、2月に行われる外部試験の受験生たちと一緒にまた受験する事ができます。それも、個別にお話ししますので。」

出席番号の早い桃はすぐに呼ばれた。

「朝田桃さん。そこに掛けて。」

桃は緊張した顔で、担任に言われた椅子に腰掛ける。

担任は笑顔で

「おめでとう、合格です。頑張ったわね、これまでの試験よりうんと良い成績ですよ。」

そう言った。

桃は嬉しくて、涙目になってしまった。



「ありがとうございます！良かった！これからも頑張ります！！」

担任から書類を受け取った桃は、教室へ戻り、急いで帰り支度をして、学校を飛び出した。

桃は帰り道で小夏にメールをした。

小夏は、わざわざ電話を掛けてきてくれた。

『桃！おめでとう！！絶対受かるって思ってたよ。だって、ここの所の桃の演奏、すごく良かったもの。ほんと、おめでとう！！』

小夏は自分の事のように喜んでくれた。

「ありがとう、小夏。私嬉しいよ～！」

小夏としばらく話しているうちに、自宅近所の公園の前まで来ていた。

「じゃあ、また明日学校でね。」

そう言って電話を切り、顔をあげると...

公園にヒカルがいた。

「え...なんで...」

「桃ちゃん、おかえり。」

「ヒカルさん...」

「ストラップ使ってくれてるんだね...。大学試験の発表、どうだった？」

「それでわざわざ来てくれたんですか？」

「きっと、合格してるだろうと思って。で、合格したんでしょ？」

「...はい！そうなんです。私すごく嬉しくて！」

「おめでとう！」

そう言うと、ヒカルが桃の頭を撫でた。

「...。」

桃はもうこれ以上自分の心臓が早く動く事は無いだろうというくらい、ドキドキした。

「どうしたの？」

「い、いえ、なんでもないんです。」

ヒカルと桃はベンチに腰をおろした。  
桃はまだドキドキしていた。

「きょ、今日はお休みなんですか？」

桃は何を話してよいやらわからず、そんな事を聞いた。

「ううん、ちょっと時間が空いたからここに来てみたんだ。桃ちゃんが何時に学校が終わるのかわからなかったけど、ここに来たら会える気がして。」

ヒカルの言葉にいちいちドキドキする。

「そうなんですか...」

「桃ちゃんも無事、女子大生になれるんだなあ。」

「なんか、その言い方いやらしい。」

桃は笑った。

「男は皆いやらしい生き物だ。」

「そうなんですか？」

桃はまたいつの間にか緊張が解けていた。

ヒカルと話していると安心する。

その安心感からか、父親の事を話していた。

「...で、今度お父さんのコンサートに行くんだね。」

「はい。でもすごく久しぶりだし、それに私たちが行ってお父さんがどう思うか...」

「桃ちゃんが思っている事を素直に伝えればいいんじゃないかな。」

「思っている事？」

「そう。今までお父さんに対して思っていた事、今思っている事、そして会う日に思った事。」

「自分の思い...」

「そうだよ、だって実のお父さんだろう。娘が思っている事を聞きたいと思うよ。」

「そうなのかな...」

「あ、俺そろそろ戻らないと。まだこれから仕事があるんだ。ごめんね慌ただしくて。」

「あ、いえ、お仕事頑張ってくださいね。」

「うん、ありがとう。じゃあまた。」

そう言うとヒカルは行ってしまった。

その日からしばらくして、ウィーンから小夏の合格通知が届いた。

「小夏！やったね！！本当にすごい！私の友達がオルヒデーエに行くなんて！！」

「大学はバラバラになっちゃうけど、ずっと友達だよお〜〜〜！」

「今日は寄り道して、二人でお祝いしよう♪」

「そうだね、桃の合格祝いも先延ばしにしてたもんね♪」

「ありがとう。その前にCD屋さんに行こう。小夏がピアノを弾いたSHUの新曲って今日発売でしょ？」

「覚えててくれたんだ〜。そうそう、今日だよ。私は一足先に貰ってたの。」

「そうなのー？知らなかった。」

「だってね、発売日まで誰にも聞かせちゃダメだって言われてたの。ごめんね。」

「ううん、楽しみにしてたよ。」

桃と小夏がCDショップに入ると、SHUの新曲が一番目立つ所に置かれていた。

「これかぁ♪」

桃は1枚手に取り、CDのジャケットを見た。  
小さく小夏の名前が書かれていた。

「あ、小夏の名前も入ってる！」

「なんか、照れる...」

桃はその1枚を購入すると、小夏と二人でTAICHI' cafeに向かった。

「お祝いって言っても、結局ここだけど（笑）」

「いいじゃん、太一さん優しいし。私好きよ～」

小夏が言う。

「いらっしゃーい」

奥さんのより子さんが迎えてくれた。

「今日はね、二人の合格祝いなの。」

「え、じゃあ、小夏ちゃんもオーストリアの学校合格したのね!？」

「そうなんです。」

「わー!すごい!!おめでとう。今日は好きな物頼んでね。全部おごりよ、マスターの。」

「おいおい、勝手に何言ってんだ?」

マスターがカウンターの向こうから笑いながら言う。

「いいじゃない、今日はお祝いよ!」

桃と小夏は遠慮なしにどんどん食べて、飲んだ。

マスターや小夏との会話もとても楽しく、あっという間に時間が過ぎた。

「あ、桃、もうこんな時間だよ。」

「ほんとだ、マスター、より子さんご馳走様でした!ありがとう。」

「ううん、またいつでもおいで。気を付けて帰るんだよ。」

「はーい」



そう言うと、桃と小夏は店を出た。

「じゃあね、また明日！」

桃は自宅に戻ると、SHUのCDをデッキに入れた。

イントロに小夏のピアノが流れてくる。

「小夏のピアノで始まるんだあ...」

SHUの新曲は、切ないバラードだった。

タイトルは'涙の跡'。

SHUの甘い声と、小夏のピアノがとてもよくマッチしている感じがして、桃は何回も何回も聴いた。

歌詞を見ると、また切なくて、涙が出そうになった。

— 会いたいよ  
    こんなにも 大事だなんて  
    失って 初めて わかった  
    部屋に残された 君の涙の跡に  
    僕の涙が 重なる —

「失恋の歌なんだ...SHUもこういう恋愛してきたのかなあ。」

桃は独り言を言い、小夏にメールを入れた。

— すごく良い曲だね。SHUの声と小夏のピアノがぴったりだよ！何回も聴いています...  
—

SHUの新曲はその週のランキングで1位だった。

小夏の事も、テレビで少し取り上げられるようになり、栄星からオルヒデーエに合格した事なども報道された小夏は、ちょっぴり有名人になった。

翌日学校で会った小夏は、

「でも、もう来年からウィーンだし、すぐにこんな事も言われなくなるよ。」

と、恥ずかしそうに言った。

「ほんと、小夏のピアノとSHUの声がぴったりだよね！それに、あの詞がいいわあ。」

「そうだよね、私もレコーディングしてて、本当に失恋した気分になってきちゃったもん。あ、それでね、桃。」

「ん？」

「今度、この曲の初登場1位を祝したパーティーがあるの。行かない？」

「え！？私も行っていいの！？」

「もちろん！お友達連れて来て、って言われてるし、それに桃がオーディションで励ましてくれなかったら合格できなかったもん。パーティーって言っても、レコード会社の人たちが集まる気軽なパーティーみたいだけどね。」

「ありがとう、私行きたい！」

「じゃ、SHUのマネージャーさんに言っておくね。楽しみだね～～」

「うん♪なんだか、最近良い事ばかり♪」

「ん？桃何かあったな？」

「んふふ一、まあね。」

「なにになに、教えてよ一。」

「大学の合格発表の日にね、ヒカルさんが近所の公園まで来てくれたの。」

「え、それでそれで？」

「ん一。別に、ただ合格しました、って伝えただけだけど…」

「それだけ？」

「うん」

「ふーん。」

と、小夏はなんだかニヤニヤしながら言った。

「ま、いいや。で、お父さんの方は？コンサートに行くんでしょう？」

「うん、ちょっと緊張するなあ。」

「楽屋に行くの？」

「お母さんが、行けるように係りの人をお願いしてくれたみたい。樹と二人で行くつもり。」

「そっか…」

とだけ小夏は言った。

クリスマスも近付き、街は早めにネオンを飾り付ける店も増えてきた。

父のコンサートの日は、風の冷たい日で、桃は新しいコートを着て出かけた。  
樹は、いつも以上にお喋りだ。

「姉ちゃん、親父の事どう思ってる？」

「んー、私もあまり記憶にないのよね。お父さんいつも家にいなかったし、それに...」

「母ちゃんと喧嘩ばかりだった...」

「うん。」

父は訪れた私たちに何と言うだろうか、それに久しぶりに会う子供たちの顔を覚えているんだろうか...

桃は少し不安になってきた。

— 桃ちゃんが思っている事を  
素直に伝えればいいんじゃないかな。 —

ヒカルの言葉を思い出した。

「そうだよね...」

そうつぶやいて、樹と会場へ入った。

『世界的バイオリニスト 松本敬一 日本公演』

と書かれた看板が目に入った。

桃と樹は両親が離婚するまで「松本」姓だった。

1階の中央付近に二人の席があった。

おしゃべりだった樹も席に着くと黙った。

アナウンスが一通りの注意事項を言い、開始のブザーが鳴る。

桃は緊張した。

オーケストラのメンバーが順に席に着き、指揮者と父が舞台左手からゆっくりと出てきた。

(お父さん...)

樹の方をチラッと見ると、父から目が離せないという顔でじっと舞台を見つめていた。

演奏が始まる。

ブラームスヴァイオリン協奏曲ニ長調。

父もバイオリンを構えた。

父のバイオリンは、観客全員を父の世界に引き込む力を持っていた。

そこにいる全ての人が、父を見つめ、一音も聴き逃すまいと、演奏を聴くことに集中していた。

桃は涙が止まらなかった。

演奏に感動しているのか、父と会えた事に感動しているのか、わからなかったが、とにかく涙が止まらなかった。

激しい拍手と、歓喜の声、スタンディングオベーションで桃は我に返った。

「姉ちゃん、親父すげーな...」

樹も涙目だった。

「うん、あれが私たちのお父さんなんだね...」

二人とも、しばらく客席から動けなかった。



観客がほとんどいなくなった頃、桃と樹は父の楽屋へ向かっていた。

楽屋の前で少し立ち止まる。

「姉ちゃん...？」

「うん...」

桃はノックした。『どうぞ。』と父の声が答えた。

緊張してドアを開ける。

父がゆっくりとこちらを振り返った。

3人とも少しの間沈黙し、その空気を切るように父が、

「久しぶりだね。」

と笑顔で言った。

桃と樹は父に駆け寄り、父もまたそんな二人を抱きしめてくれた。

— 桃ちゃんが思っている事を  
素直に伝えればいいんじゃないかな。 —

「お父さん、会いたかった！」

桃は、その日まで思っていたその言葉を父にぶつけた。

父は二人を交互に見ると、

「大きくなったな、二人とも。父さんも会いたかったよ、よく来てくれたね。」

と言った。

長年離れていた親子の距離が縮むのに、不思議と時間はかからなかった。

桃と樹は夢中で色々な事を話した。

父は黙って笑顔で聞いてくれていた。

「じゃあ、樹は高校ではバイオリン科に進むんだな？」

「うん、俺もいつか父さんみたいな演奏をしたい。」

「嬉しい事を言ってくれるな。」

父の顔がほころんだ。

「お母さんは...元気か？」

父が遠慮がちに聞く。

「うん！すごい元気、元気すぎ！」

「そうか、それは良かった。」

とだけ父が言った。

「お母さんとは会わないの？」

「うん、まあ、そうだな...」

父が曖昧に返事をする。

桃も、これ以上母の話はしない方が良い気がして、  
それ以上は聞かなかった。

「ほら、二人とも、タクシーを呼んであげるからもう帰りなさい。お母さんが心配するよ。私はしばらくこのホテルに滞在しているからね、いつでも訪ねておいで。」

そう言うと、父はホテル名の書かれたメモをくれた。

「うん、じゃあ、今日は帰るね。」

「気を付けて。」

父がホールの外まで送ってくれた。

タクシーに乗り込み、父が見えなくなるまで手を振った。

父が見えないところまで来ると、樹が、

「親父...イメージと違ってたな...」

と言った。

「うん、そうだね、なんていうか、もっと怖い人だと思ってた。」

「うん...。」

桃と樹は今日の演奏と、父に会えた事に感動していた。

父との再会から、桃は母とも父の話をするようになった。

「お父さんは、あなた達の事をとっても愛していたわよ。お母さんも、もっとあなた達にお父さんの事を話すべきだったわね。ごめんね。」

(もっと早くお父さんの話を聞けば良かったな...)

桃は率直にそう思った。離婚間際は、喧嘩ばかりだった両親も、最初からそうだったわけではないはずだ。

でも、過ぎた事は考えても仕方がないし、これからの父との付き合い方を考えていこう、と樹とも話していた。

学校に行くと、小夏も心配してくれていた。

「お父さんと会えて本当に良かったね。」

こうやって、いつも小夏は自分の事のように心配してくれる。

「うん、イメージしていたよりも優しい人で、私たちの事も心配してくれてたみたいで...」

「そう、じゃあ、これからはちょくちょく会えるの？」

「しばらく日本のホテルにいるから、コンサートのない日は会えるんだと思う。」

「良かったじゃない！今までの分も甘えないとね。」

「うん。そうだね。」

「あ、それでね、これ、パーティーの招待状。」

小夏が1枚のチケットを差し出す。

「あ、SHUの新曲の？」

「うん、今度の土曜日。気軽なパーティーみたいだけど、一応、これがないと入れないみたい。」

「わかった。楽しみにしてるね。」

そう言って桃はチケットを受け取り、鞆にしまった。

SHUのパーティーは、こじんまりとしたレストランを貸し切って行われた。

受付でチケットを差し出し、中へ入る。

小夏は先に到着していた。

「桃！桃！こっち！」

小夏に呼ばれ、桃は奥へ進んだ。

なんだかテレビで見たことのある人もいて、ちょっぴり緊張した。

「小夏、もう来てたんだ。わー、美味しそう〜〜〜♪」

レストランには、食事がたくさん並べられ、どれもこれも美味しそうだった。

「桃ちゃんは色気より食い気か（笑）」

声のした方を振り返ると、ヒカルがそこに立っていた。

「ヒカルさん！？どうしてここに！？」

「あー、SHUの招待でね。」

「そうなんですか、びっくりした〜。あ、この子が友人の小夏です。」

桃はヒカルに小夏を紹介した。

「小夏ちゃん、初めまして。噂のピアノの天才だね？」

「て...天才じゃないですけど...」

小夏は少し照れて言った。

「SHUがえらく褒めてたよ。若いのに自分の世界観を持ってる子だってね。」

小夏が更に赤くなる。

「反応が初々しいな。」

ヒカルが少し茶化すように言った。

「お、ほら噂をすればご本人の到着だよ。」

ヒカルの目線を辿ると、SHUが到着した所だった。

「ヒカル、来てくれたんだな。仕事じゃなかったのか？」

SHUがヒカルに聞く。

「親友のせっかくの招待だからな。」

「そんな事言って、本当はケンだけ仕事が入ったんじゃないのか。」

「バレたか。相方も一人の仕事が増えてきたからなあ。」

SHUが笑った。

ケンとは、ヒカルの相方だ。



SHUが今度は小夏の方を見て言った。

「小夏ちゃん、今回は本当にありがとう。君のお陰で1位になれたようなもんだ。」

「え...そんな...」

「本当、本当。あんなすごいピアノ聴いたことがなかったからね。ウィーンに行っちゃうなんて、残念だな。」

小夏はもはや、真っ赤を通り越した顔色をしていた。

「こちらは、お友達？」

SHUが、桃の方を向いて聞いた。

「あ、小夏と同級生で、朝田桃と言います！」

「桃ちゃんかあ。よろしくね。ヒカルと知り合い？」

「あ、はい、まあ...」

桃は何と答えて良いかわからず、そういう言い方をした。

「気をつけろよ、こいつは手が早いからな（笑）」

「お前に言われたくないな。」

ヒカルが言う。

「とにかく、今日は楽しんで行ってね。小夏ちゃん、後で曲の披露もあるからね、スタンバイよろしく。」

そう言うと、SHUは、また別の人の所へ行った。

「えー！生で聴けるんだ！！うれしー！」

と桃が言うと、

「うん、じゃあ、ちょっと行ってくるね。」

と言って、小夏が小さく作られたステージの方へ歩いて行った。

『お楽しみ中かとは思いますが、ここでSHUさんに曲を披露していただきましょう。曲はもちろん新曲'涙の跡'です。』

アナウンスがそう言い、小夏がピアノの前に座る。

ピアノのイントロが流れ、SHUがそっと歌いだした。

CDで何回も聴いてはいたけれど、やっぱり生で聴くのとでは訳が違った。切なく、どこか優しい雰囲気バラードは、そこにいる皆の涙を誘った。

演奏が終わると、一斉に拍手が沸く。

「ほんと、綺麗な歌...」

桃がつぶやく。隣にいたヒカルは何故か拍手もせずに、じっとステージの方を見つめているだけだった。

「ヒカルさん...？」

「あ、うん？なに？」

「いえ、何か考え事ですか？」

「ううん、そんな事ないよ、ちょっと俺トイレ。」

そう言うと、ヒカルは部屋の外に出て行ってしまった。

小夏が桃の所に戻ってきた。

「小夏！すごく良かったよ～。感動しちゃった。」

「ありがとう。あれ、ヒカルさんは？」

「うん、お手洗いに行ったよ。」

しばらく飲んだり食べたりしていると、ヒカルがSHUと一緒にこっちにやってきた。

「もし二人が良かったらなんだけど、この後時間ある？小夏ちゃんの留学の話も聞きたいし、うちに来ないか？もちろん、俺のマネージャーも一緒だよ。」

SHUはそう言うと、後ろの方に立っている女性マネージャーを指差した。

「ヒカルも来るよな？」

SHUがヒカルに聞く。

「いいよ。今日の仕事は終わったから。」

そうヒカルが答えた。

桃と小夏は小さい声で相談した。

「桃、どうする？」

「うん...どうしようか、ちょっとだけなら...」

「そうだね...」

「じゃ、決まりだな」裏口に車回しておくから。」

SHUがそう言った。

タクシーがマンションの前で停まった。

SHUのマンションは、桃が見た事がないような高級マンションだった。

「こっちだよ。」

SHUとヒカルが先を歩く。

「わ...すご...」

ホテルのロビーのようなエントランスを抜けて、エレベーターに乗り込む。  
後ろから女性マネージャーがついてきた。

「こんにちは、SHUのマネージャーの高井です。小夏さんは、レコーディングで会ったわね。」

「はい、お久しぶりです。高井さん。こちらは友人の朝田桃さんです。」

「はじめまして。」

桃が挨拶をすると、

「ごめんなさいね、ご迷惑じゃなかったかしら？SHUは男性でも女性でも気に入った人にはとことん関わりたくなるタイプでね、小夏さんのピアノによっぽど惚れ込んだのね。」

「...嬉しいです。」

小夏が恥ずかしそうに答えた。

「あんまり俺の悪口言うなよ？」

SHUがこちらを振り返って言った。

「悪口なんて言ってないわよ。」

マネージャーの高井が答える。

エレベーターが最上階で止まった。  
一番奥の部屋がSHUの自宅らしい。

「さ、どうぞ。」

SHUに促されて部屋の中に入る。  
広い玄関から、廊下を抜けて、これまた広いリビングに通された。

桃と小夏はあまりの広さに、キョロキョロと顔を動かした。

柔らかいソファに腰を下ろすと、マネージャーの高井さんが紅茶を淹れてくれ、これがまたすごく美味しい紅茶で、桃は感動した。

SHUは、学校の授業の事、小夏の留学の事、色々興味深そうに聞いてきた。

「へー、じゃあ小夏ちゃんは学年トップなんだね？知らなかったなあ。それで来年の4月からは二人とも晴れて大学生ってわけか。あっちの学校も4月からなの？」

「はい、色々な国から受験があるので、4月生と9月生と2つに分かれて入学できるようになってるんです。」

「なるほどね〜。」

SHUがそう言った時、キッチンから高井さんが出てきた。

「それじゃあ、SHU、私はこれで、帰るから。」

「え？もう帰るの？」

「まだ会社に仕事が残ってるのよ。女の子二人に変な事しないように。責任を持ってご自宅に帰



してね。」

「はいはい、わかってるよ。お疲れ様でした。」

「それじゃ、ヒカルさん、小夏さん、桃さん、また。」

そう言うと、高井さんは部屋を出ていった。

部屋には、SHU、ヒカル、小夏、桃の4人になった。

「それでさ、ヒカル。」

おもむろにSHUがヒカルの方を見て言った。

「ん？」

「桃ちゃんとはどういうご関係？」

桃は驚いて紅茶を吹き出しそうになってしまった。

「SHUさん、ご関係って！」

そう言いつつも、桃はヒカルが何と答えるのか、緊張して待っていた。

「そうだな、1度デートをしたよ。」

「ほうほう。それで？」

「まだ、それだけだよ。」

「まだって事は、発展するのか？」

桃は、SHUとヒカルを交互に見ながら聞いていた。  
胸がドキドキする。

「それは俺一人では決められないな。」

そう言ってヒカルは桃の方を見た。  
急に視線が合ったので、桃は咄嗟にうつむいてしまった。

「桃ちゃんが困ってるぞ。今日はこのくらいにしておくか。」

SHUがそう言ってくれたので、この会話が終わったことに、桃は少しホッとした。

小夏が話題を変える。

「それにしても、'涙の跡'ってすごく切ない詞ですよ。でもどこか、優しさがあるような。」

「あの詞はね…」

とSHUが何か言いかけた所で、ヒカルが、

「SHU、焼酎あったろ？芋焼酎。これ開けるぞ？」

と、話を遮るように言った。

「あ、ああ、どうぞ。」

ヒカルが焼酎を飲みだし、ちょっと陽気になってコメディアンらしいヒカルになった。

その後は、バラエティ番組の収録の事、漫才を作る時の話、相方のケンの事を面白く聞かせてくれた。

この時桃は、ヒカルの本名が「田所光（外`コヒカル）」だと、初めて知った。

「それで、相方が三谷健（ミタニケン）'だから、二人合わせて『ミドコロ』ってコンビ名なんだよ。」

「なるほど〜〜〜！」

桃と小夏が同時に頷いた。

「ちなみに、俺は'柊（ひいらぎ）'って書いて'しゅう'。金井柊（カイシュウ）。」

「それで、二人は同級生だったんですよね？」

小夏の質問にSHUが答える。

「そうだよ、高校の同級生。あの頃は、まさか二人して芸能界に入るとは思ってもみなかったな。」

「そうだな。馬鹿ばかりやってたな...」

「ヒカル、おまえは今もだけどな。」

皆、一斉に笑った。

楽しい時間はあっという間に過ぎた。

「二人とも、タクシーを呼ぶからもう帰らないとね。」

桃はSHUに言われるまで、外が暗くなっている事に気がつかなかった。

「はい、今日はとっても楽しかったです。ありがとうございます。」

小夏と桃はSHUにお礼を言った。

「ヒカル、お前一緒に乗って送ってあげたら？」

「ああ、そうだね。」

「それじゃ、小夏ちゃん、桃ちゃん、またいつでもおいで。」

「はい。お邪魔しました。」

ヒカル、桃、小夏の3人が帰り支度をして、マンションから出ると、SHUが呼んでくれていたタクシーが待っていた。

「小夏ちゃんが一番近いのかな？」

「そうですね、じゃあ、私前に乗ります。」

小夏が桃に小さくウインクして助手席に乗った。

後部座席に、ヒカルと桃が乗り込む。

いつの間にかヒカルは、『変装用』のいつもの眼鏡をかけていた。

小夏の家に着くまで、3人は黙っていた。

ただ、ヒカルの手は、桃の手の上に置かれていた。

桃は話さなかったのではなく、緊張して話せなかったのだ。

タクシーが小夏の家の前で停まる。

「それじゃあ、ヒカルさん、ありがとうございました。桃、また学校でね。」

「うん、小夏、おやすみ！」

桃は声を振り絞って小夏に言った。

タクシーがまた走りだす。  
しばらくしてヒカルが口を開いた。

「さっきの話の続きだけど。」

ヒカルの手は桃の手の上に置かれたままだ。

「さっきの...？」

「俺一人じゃ、二人の仲を発展させられないって話。」

「あ...」

「俺は...桃ちゃんの事をもっと知りたい。」

ヒカルが桃の目を真っ直ぐ見て言った。  
タクシーが桃の自宅の前に着いた。

「私も...」

桃がそう答えると



ヒカルがそっと桃にキスをした。

クリスマス目の街は、ネオンに飾られて、いつもよりも明るく、華やかだった。

街を歩き交う人々も、不思議と幸せそうに見えた。

桃はそんな街角で、少しだけメイクをして、少しだけお洒落をして彼の到着を待った。

「桃ちゃん！ごめんね、待たせて。」

ヒカルが息を切らせて到着した。

「いえ、私もさっき着いたところですから気にしないで下さいね。」

「そう？ごめんね、仕事が押しちゃって。タクシーも道が混んでると思って、電車で来たんだ...  
。はい♪プレゼント。」

ヒカルが一輪のバラの花を差し出した。

「わあ、嬉しいです。ありがとうございます。」

「桃ちゃんさあ...」

「はい？」

「その話し方、やめようか。もう、俺達...」

ヒカルが桃の目を見て、

「恋人同士なんだよ。ヒカルって呼んでくれていいんだからね。」

と真面目な顔で言った。

桃は自分の頬が赤く染まるのを感じた。そして小さく、

「うん。」

と答えた。

ヒカルがクリスマス当日は、仕事でどうしても都合が悪いと言うので、少し早いこの日にクリスマスのデートをしよう、と言ってくれた。

桃は、タクシーの中でキスをされたあの日から、夢でも見ているような気分で毎日を過ごしていた。

でも、今、こうして目の前にヒカルがいる。

「お腹空いたね、何か食べよう。」

ヒカルが桃の手を取り、少しだけ強引に引っ張っていく。  
彼の温もりが伝わってくる気がして、桃はすごく幸せな気持ちになった。

親友の小夏にだけはヒカルとの事を話していた。  
小夏は特に驚くでもなく、「そんな気がしてたよ。」と言った。そして「良かったね、その恋を大事にしないとね。」とも言ってくれた。

「ここにしよう。」

ヒカルが、レストランのドアを開けて、桃を先に入れた。  
少し薄暗い店内の個室に通される。

食事中も、桃は幸せを感じていた。  
ヒカルの仕事の話、桃の学校の話、小夏の話。  
特になんてことのないこの時間が、とても幸せだった。

「年末年始は、少し仕事がバタバタするから、会える時間が少ないかもしれないんだ。」

そう言われた時も、寂しいとは思わなかった。

「大丈夫、今はメールもあるし、それに...」

「それに？」

「テレビで見られるもん。」

桃は笑ってそう言った。

食事を済ませた二人は、当てもなく街を歩いた。

雑貨店に入ったり、楽器店に入ったり、思い付くままに楽しんだ。

少し疲れたので、二人はベンチに腰かけた。

「プレゼントがあるの。」

「え？ そうなの？ 嬉しいなあ。」

ヒカルの為に用意した物は、皮のブレスレットだった。

「あんまり良いものじゃなくて恥ずかしいんだけど...」

「そんな事ないって！ 桃ちゃんが俺の為に選んでくれたんだろう？ すごく嬉しいよ。それに、俺に似合ってる」

ブレスレットを付けて、ヒカルが笑った。

「桃ちゃん、俺は2つ、プレゼントがあるんだよ。」

「2つも！？」

「まずは、これ。」

ヒカルが小さな箱を取り出した。

「開けてみて。」

桃はドキドキしながら、箱を開けた。

中にはネックレスが入っていた。ペンダントトップには、一粒のダイヤと、プラチナのハートが付いていた。

「すごく可愛い！！」

ヒカルが、ネックレスを桃の首に回し、付けてくれた。

「気に入ってくれてホッとしたよ。大学合格のお祝いしてなかったもんな。...それと、こっちは、クリスマスプレゼント。」

ヒカルが差し出したものは、鍵だった。

「俺の部屋の鍵だよ。」

「部屋の鍵...」

桃は驚いたけれど、とても嬉しかった。

「桃ちゃん、大切にするよ。」

ヒカルはそう言うと、桃を抱きしめた。



自分の部屋に戻った桃は、ヒカルの部屋の鍵を眺めていた。

顔が自然とにやけてしまう。

「本当に付き合ってるんだ、私たち...」

桃が独り言を言った時、メールが鳴った。

— 今日は本当に楽しかったね。  
それに、ブレスレットありがとう。  
大事にするよ。  
今度は俺の部屋にも来てね。  
あ、変な事はしないよ（笑）  
おやすみ。

—

「変な事って...」

桃はひとりで笑った。

その日からのヒカルは本当に忙しそうで、テレビを見ているだけの桃にもそれが伝わった。

「あ、また出てる。これは確か生放送だよね...」

年末の特別番組には必ずと言っていいほど、ヒカルが出ていた。

桃はこの手のバラエティー番組はあまり見た事がなかった。

学校から帰宅すれば、すぐにピアノの練習をしていたし、それ以外の時間は、ドラマを見たり、音楽を聴いたりしていた。

テレビを眺めていると、桃はある事に気が付いた。

「ブレスレット...」

桃がプレゼントしたブレスレットをヒカルが付けてくれていたのだ。

自分だけが知っている秘密のような気がして、桃はそれが嬉しかった。  
と、同時に、ファンから浴びせられる黄色い声援に胸がチクとなった。

(いやだな...ヤキモチかな。)

ヒカルとケンの『ミドコロ』はとても人気があるコンビだった。  
少しミーハーな小夏にも、それを何回も聞かされたことがある。

桃はあまり知らなかったのだが、ミドコロの二人が新人の年には、お笑い新人賞を獲り、次の年からも芸術大賞などを受賞したりしていた。

(人気あるんだ...)

桃は今更ながらそんな事を思っていた。

ヒカルにメールを打つ。

— 今、生放送見てたよ。  
面白かった〜♪  
とっても忙しそうだね。  
体には気を付けてね。 —

深夜まで起きて待ってみたけれど、その日、ヒカルからの返信はなかった。

翌日、桃は少し慌てた様子の小夏に呼ばれた。

「桃！桃！」

「ん？どうしたの？」

「あのね、私も知らなかったんだけど...」

「うん。」

「あの詞、ヒカルさんが書いたんだって！！」

「ええ！？詞って、'涙の跡'？」

「そうそう！作詞家さんの名前がペンネームだったから、全然気が付かなかったんだけど、スタッフの人から『この詞を書いたのミドコロのヒカルさんなんだよ。』って聞いて…。でもね、この話は内輪以外には内緒なんだって。」

「びっくり…」

「でしょ。だって、あの詞すごく切ない別れの歌だもん。」

— 会いたいよ  
こんなにも 大事だなんて  
失って 初めて わかった  
部屋に残された 君の涙の跡に  
僕の涙が 重なる —

桃は詞のフレーズを思い出していた。

「ヒカル、そんな事一言も言わなかったよ…」

「そうだよね…桃にも言ってないんだもんね。よっぽど内密な話なのかなあ？」

桃はなんとなくそうじゃない気がした。

自宅に帰ってから、改めて'涙の跡'のCDを取り出してみた。

作曲は、SHUだ。

作詞のところには、KOUと書かれていた。

「コウ？これがヒカルなの？」

詞を初めから読んでみる。

恋人と別れ、失ってみてその大事さに気が付き、後悔したけれど、遅いというような内容だった。

「ヒカルの体験した恋愛なのかな...」

まだヒカルが書いた詞だと本人に聞いたわけでもないし、想像で書いたものかもしれない。体験から書いたものだとしても、もう過ぎた恋愛のはず。

桃は首元に揺れるヒカルからもらったネックレスを握りしめた。

心が痛かった。

桃の心がなんとなくモヤモヤしたまま、年が明けた。  
学校は冬休みに入っていた。

ヒカルとはメールや電話はしていたけれど、クリスマスの前に会って以来、会う事はできないままだった。

それに、詞の事も聞けずにいた。

数日経って、ヒカルからのメールに

— 明日の午後、休みになったんだ。  
良かったら、うちにこない？  
昼過ぎに来て待っててくれてもいいよ。 —

と書かれていた。

桃は、

— わかった。  
明日のお昼過ぎに行かせてもらうね。 —

とだけ、返信した。

住所は聞いていたけれど、初めて行くヒカルの自宅。  
久しぶりに会うから、嬉しいはずなのに、桃の頭は詞の事でいっぱいだった。

(明日、聞いてみようかな...)

翌日、桃は電車でヒカルの教えてくれたマンションに向かった。

「えーっと、この辺りのはず…。あ、ここだ。」

オートロックの玄関を合鍵で開けた。

ドキドキする。

エレベーターに乗り、部屋の前まで来ると、ドキドキが更に強くなった。

「お邪魔します…」

薄暗い部屋に入り、電気をつけた。

余計な物がない感じの、シンプルな部屋だった。

テーブルの上に雑誌が雑然と置かれている。

桃は買い物袋をその横に置いた。

近所のスーパーで食料品を買ってきたのだ。

「失敗しませんように…」

桃は、ハンバーグとグラタンを作る予定にしていた。

初めてデートをした時、ヒカルがレストランで注文したのを覚えていたからだった。

「フライパンは…ここか。」

当たり前だけれど、初めてきた家のキッチンでの料理は、時間がかかった。

だいぶ時間をかけて、料理が出来上がった頃、玄関が開く音がした。



「うわっ。いい匂い♪」

仕事を終えたヒカルが帰ってきた。

「お、おかえりなさい、勝手にキッチン使ってごめんね...」

「『おかえりなさい』っていいね〜♪しかもハンバーグとグラタン？」

フライパンを覗きこんで、ヒカルが言った。

「上手にできたか...わからないけど...」

「朝早くからロケで何も食べてないんだ。いただきます♪」

ヒカルが洗面所にいつている間に、テーブルに並べる。

「いただきます♪」

ヒカルが一口頬張った。

「うまい!!!」

「ほんと？」

「うまいよ〜。これは店出せるな。」

桃は笑って、

「それは言いすぎ。」

と言うと、

「あ、そっか。でも本当にうまいよ。」

ヒカルは本当に美味しそうに食べてくれた。

「ご馳走様でした」お礼に美味しい紅茶を淹れましょう。」

ヒカルがミルクティーを淹れてくれる。

「はい、どうぞ。熱いから気を付けてね。」

「ありがとう。」

改めてヒカルの部屋を見渡した。

「結構綺麗にしてるんだね。」

「仕事が忙しいと、帰って寝るだけだからなあ。」

「そっか、最近忙しそうもんね。」

桃は'涙の跡'の詞の事をなかなか言い出せずにいた。

「しゅ、SHUさんは元気？」

桃が急にSHUの事を話題に出したので、ヒカルが少しキョトンとして、

「SHU?この前スタジオで会ったけど、元気そうだったよ。SHUがどうかした？」

「あ、ううん...」

桃はうつむいてしまった。

「桃ちゃん、何か言いたい事があるなら言っていていいんだよ。」

桃は考えた。

詞の事を聞くべきか、まだ黙っておくべきか。

それに、あの詞がヒカルのものだとして、どうしてこんなにも気になるのか、桃自身もよくわからなかった。

でも、あの詞はヒカルが書いたものなのか、本人の口から聞きたいのが本心だった。

「あのね...」

少し時間をおいて、桃が話したず。

「うん。なに？」

「涙の跡'の事なんだけど。」

桃がそう言うと、それまでニコニコしていたヒカルの顔が一瞬、固まったような気がした。

「うん。」

「あの詞って、ヒカルが書いたの？」

数秒沈黙してヒカルが、

「そうだよ。」

と答えた。

「やっぱりそうなんだ。小夏がスタッフさんにそう聞いたらしくって。」

「そっか、SHUの曲に詞を書くのは初めてじゃないんだよ。シングルの曲に書いたのはあれが初めてなんだけど...それに、内輪以外にはこの話は言わない事になってる。」

「そうなんだ...。'KOU'って名前で書いてるんだね？」

「ああ、あれは光（ヒカル）が'コウ'とも読めるだろう？それで学生時代に'コウ'って呼ばれてたことがあって、それで、KOU。」

「そっか...」

桃はそれ以上聞ける事がなくなってしまった。

SHUの家に招かれた時、'涙の跡'の詞の話をしてSHUがしようとしたら、ヒカルが急にお酒を飲むと言いだして、話を遮った事があった。

まだ気になる事はあったけれど、桃はこの話はこれで終わりにしようと思った。  
ヒカルもそれ以上自分からは話さなかった。

「ところでね、桃ちゃん。」

ヒカルが話を変えた。

「今度SHUの別荘に行こうって話があるんだよ。」

「別荘？」

「そう。俺もあいつも来週以降少し時間が取れるし、学校がない週末に、小夏ちゃんも誘って、4人で、どう？小さいけど、スタジオもあるんだよ。」

「うん、お母さんに聞いてみないと...」

「そうだね、もしOKならメールしてね。SHUに伝えておくし。小夏ちゃんにも聞いてみて。」

「わかった。」

ヒカルが急に真面目な顔をして桃の方を向いた。

「桃ちゃん。」

「うん？」

「もしも不安な事があるなら、何でも言ってほしい。」

「うん.... ...ないよ。」

桃はそう答えた。

ヒカルは桃を自分の方へ引き寄せて、抱きしめながら

「忙しくて、あまり会えなくてゴメン。」

と言って、キスをした。

桃の心の中のモヤモヤは、少し薄らいだ。



冬休みが明けて、学校が始まった。

SHUの別荘に行く話を小夏にすると、

「え！？うそ！？行く行く！」

と大はしゃぎだ。

「土日で泊まりらしいよ？」

「うーん、うちの親はたぶん大丈夫かな？SHUの事、信用してるみたいだし、マネージャーの高井さんが何回もうちに来て、色々お世話してくれてたから...」

「そっか。」

「それより、桃、お母さんにヒカルさんとの事話したの？」

「ううん、まだ。話すつもりだけど...」

タレントのヒカルと付き合ってるなんて言ったら、母は何と言うのだろう？

「お母さん、びっくりするだろうね...」

小夏が言った。桃もそう思う。

別荘に誘われている土曜日までには話さないと、と桃は考えていた。

レッスンが終わって、帰宅しても母はまだ帰っていなかった。  
樹はバイオリンの個人レッスンに出かけているらしい。

教師をしている母は、いつも忙しそうだし、あまり親子の時間はとれていないのかもしれないけれど、桃はそんな母を尊敬していた。

桃は夕飯の支度を始めた。  
いつも母の手伝いはしていたが、一人で全部作った事はまだなかった。  
受験も終わり、時間も取れるようになったので、たまには自分で家族の夕飯を作ってみようと、キッチンに立った。

少しして、母が帰宅した。

「ただいま～。あら？桃？ご飯作ってくれたの？」

「うん、シチュー。」

「まあ、美味しそう。帰ったらご飯ができてるなんて嬉しいわあ。」

母がそう言った。

「樹は、レッスン？まだ遅くなるわね、先に頂きましょう。」

母がそう言ってテーブルにつく。

桃は二人分のシチューとサラダをテーブルに並べた。

「うん、美味しい。」

二人は黙々と食べた。

「桃、何か話したい事があるのね？」

母に急にそう言われ、桃は少し動揺した。  
心を見透かされてる感じがした。

「...」

「なによ、黙っちゃって。」

母が笑う。

「彼氏でもできたの？」

母は桃の顔色を見て、更に笑った。

「何も話さなくてもわかるわ。正直な顔ね。」

桃は意を決したように話し始めた。

「あのね、お母さん。驚かないで聞いてほしいんだけど...」

「うん。」

「私、付き合ってる人がいて...それで...、その人芸能人なの！」

「え？」

「お笑いの'ミドコロ'って知ってるでしょう？そのヒカルさん...」

「桃、冗談？」

「本当なの、お母さん。」

母はさすがに驚いた顔をしている。

「小夏が、SHUのオーディションを受けたでしょう？その時に初めて会って、その後何回か会って...」

「桃、ちょっとまって...頭が混乱してきたわ...」

タイミング良く、テレビにヒカルが映った。

「お母さん、この人よ...」

母は口を開けてテレビを見ていた。

その時、

「ただいまー！腹減ったー！！」

樹が帰宅した。

「なんだよ、母ちゃんも姉ちゃんも変な顔して。お、シチューだ、いただきまーす。」

樹の帰宅で、ヒカルの話は一旦収まった。

夕食後、桃は自分の部屋に戻り、ヒカルにメールした。

— お母さんにヒカルの事話したの。  
— すごく驚いて、まだ何も言ってくれてない... —

その時、母に呼ばれた。  
樹は自分の部屋に戻ったようだった。

「桃、座って。」

桃は緊張してテーブルについた。

「さっきの話だけど...」

「うん...」

「本当なのね？」

「うん...」

「驚いた。相手も本気なのよね？」

「うん...」

母は少し考えて、

「いいわ、お母さん応援する。」

と言ってくれた。

「お母さん！」

「桃も、そういう年頃よね。お母さん信じてるから、自分が信じるように、やりなさい。それと...」

母は話を続けた。

「相手を信じる事。お母さんがお父さんに対して少し足りなかった事だわ。あなたは、しっかりヒカルさんを信じてあげて。」

そう言った。

「うん、わかった。それでね、お母さん。」

「うん？」

「今度の土日に、SHUの別荘に呼ばれたの。ヒカルさんと、小夏も一緒。行ってもいい？」

母はまた考えて、

「その前に一度、ヒカルさんに会わせなさい。」

と言った。

部屋に戻ると、ヒカルから返信がきていた。

— お母さんも驚いたんだろうね。  
俺、一度挨拶に行くよ。 —

ヒカルにそう言ってもらえて、桃は嬉しかった。  
そして、今度母がヒカルに会いたいと言っている事をメールで伝えた。

数日後の夜遅く、約束通り、ヒカルが桃の家に来た。

「夜分に申し訳ありません。」

ヒカルはまず、母にそう詫びた。  
樹はポカンと口を開けてヒカルを見つめている。

「はじめまして、田所光です。」

「こんばんは、ヒカルさん。田所さんって言うのね。」

母は笑顔でそう言った。

「お仕事がお忙しいんでしょう？わざわざごめんなさいね。」

母がお茶を淹れる。

「それで、娘とお付き合いしてるって聞きましたけど。」

桃は黙っていた。

「はい、ご挨拶が遅れて申し訳ありません。桃さんとお付き合いさせて頂いています。僕は、真剣です。」

ヒカルが母の顔を真っ直ぐ見てそう言った。

「そうですか...」

母は、桃とヒカルを交互に見て、

「我儘な娘だと思えますけど、よろしくお願いします。」

母は桃の方を向いて、更にこう言った。

「桃、SHUさんの別荘には気を付けて行ってらっしゃい。」

桃は笑顔で

「お母さん！ありがとう！」

そう言った。



土曜日は快晴だった。

ヒカルが、SHUと小夏を乗せて車で迎えに来てくれる予定になっていた。

携帯が鳴る。

「着いたよ。」

ヒカルに電話で言われ、玄関に出る。

母が玄関で見送りしてくれた。

ヒカルがペコっと頭を下げて、車を走らせる。

「桃、おはよう！」

後部座席から小夏が言った。

「桃ちゃん、久しぶりだね。」

その横に、SHUが座っている。

「到着まで2時間程だよ...」

そう言って、SHUは眠ってしまった。

「こいつ、昨日仕事で徹夜らしいよ。」

ヒカルが小夏と桃にそう言った。

3人で色々と話しているうちに、車はいつの間にか海岸線を走っていた。

「キモチいい！良いお天気だし。」

「もうすぐだよ。」

ヒカルがそう言って、20分程でSHUの別荘に着いた。

「これまた、豪華な...」

小夏が驚いて声をあげた。  
白い壁の立派な建物が目の前にあった。

「ん...？着いたか？」

SHUが目をごすりながら起きた。

「着いたぞ、鍵開けてくれよ。」

ヒカルに言われて、SHUが寝ぼけながら鍵を開けた。

「どうぞ、こっちに荷物置いて。」

言われるがままに荷物を置く。

「上に3部屋あるから、そこの1室を小夏ちゃんと桃ちゃんを使ってね。自由にしてくれていいよ。」

「ありがとうございます。」

「まあ、ヒカルとしては、自分と桃ちゃんを同室にしてほしいんだろうけど。」

「わかってるなら、しろよ。」

ヒカルが笑う。

桃は赤くなった。

「まあ、そういう訳にもいかないのね。」

SHUが笑いながら答えた。

「SHUさん、スタジオ見せてもらっていいですか？」

小夏がSHUに聞いた。

「もちろん、どうぞ。ピアノもあるよ。」

スタジオはそんなに広くは無かったが、ピアノやギター、機材一式が揃っているように思えた。

「簡単にならレコーディングもできるから、記念にピアノの演奏を残していてもいいよ。」

「へ～！桃、ちょっと弾いてみようよ。」

「え？小夏弾きなよ。私は...いいよ...」

するとヒカルが、

「俺は桃ちゃんのピアノ聴きたいなあ。」

と言った。

「ほらほら、別にいいじゃない。試験じゃないんだし。」

桃は小夏に押されてピアノの前に座った。

桃は一呼吸置いて、ショパンの前奏曲Op.28-15を弾いた。  
俗に「雨だれ」と呼ばれている曲だ。

桃はこの曲が好きで、自宅でもよく弾いていた。

曲が終わると、3人が拍手をしてくれた。

「バッチリ録ったよ。」

SHUが、いつの間にか録音していたようだ。

「え！？うそ！？」

「もう録っちゃったから（笑）桃ちゃんのピアノもすごく良いね。」

するとヒカルが、

「SHU、そのCD今度ダビングしてくれよ。」

と言った。

「え！？」

と桃が驚いていると、

「欲しいんだ。桃ちゃん、いいでしょ？」

とニコニコしている。

「いいけど...」

「さあ、今度は小夏ちゃん、どうぞ。」

その後もしばらく、4人はスタジオで楽しんだ。

「あれ、もうこんな時間か、昼飯の時間がとっくに過ぎてたな。」

SHUがそう言い、皆がまたリビングに戻った。

「少し待っててくれるなら、俺が作るよ。」

SHUはそう付け加えると、キッチンに入って行った。

「SHUさんってお料理するんだ〜。」

小夏が関心して言う。

「私たちもお手伝いしようか？」

桃がそう言うと、小夏が

「そうだね。」

と言ったので、二人でキッチンに入ったのだが、SHUに押し返されてしまった。

「お客様は、リビングでお待ち下さい」

しばらく待って、出てきた料理は、プロが作ったのかと見間違うほどに立派なものだった。

「今日はイタリアンにしてみました。」

前菜から、パスタ、ピザなどが次々とテーブルに運ばれてくる。

「あいつはね、見かけによらず料理が趣味なんだ。」

ヒカルが言う。

「見かけによらずは、余計だな。」

SHUがキッチンから大きな声で言った。

そういえば、SHUは大きなクーラーボックスを持参していた。  
中身はこの材料だったんだ...と桃は思っていた。



「おいしい！SHUさん天才！！」

桃がそう言うと、

「歌手辞めて店でも開こうかな。」

と、SHUが冗談を言った。

皆で昼食兼夕食を食べていると、ヒカルの携帯が鳴った。

着信を見たヒカルが、

「ちょっとゴメン...」

と言って、廊下に出た。

桃は少し気になりつつも、目の前の美味しい料理に夢中になった。

「小夏ちゃんと桃ちゃんはまだ酒が飲めないからなあ。」

「そうですね、あと2年待って下さい。」

小夏がそう言うと、

「仕方ないな、今日はヒカルと飲むしかないか。」

そうSHUが行った時にヒカルが戻ってきた。

「ヒカル、そこのワイン開けてくれよ。」

ヒカルはSHUの言葉が聞こえていないようだった。

「ヒカル？ワイン飲まないか？」

SHUがもう一度言った。

「あ？ごめん、なに？このワイン？」

ヒカルが返事をした。

席に戻ったヒカルの事が気になって、桃が

「どうかしたの？」

と聞いてみたが、「ううん、なんでもないよ。」と言って、ワインを飲みだしてしまった。

楽しい食事とお喋りは何時間も続き、小夏がウトウトし始めた。

「小夏、お部屋借りてもう休もうか？」

「ん...？うん。」

半分寝ている小夏がそう返事した。

「疲れちゃったかな。どうぞ、2階にシャワーもあるからね。自由に使って。」

「あ、じゃあ片付けしてから...」

桃が食器を下げようとする、SHUが、

「いいから、いいから、小夏ちゃん連れて行ってあげて。」

そう言ってくれたので、桃は小夏を連れて2階に上がる事にした。

「おやすみ、良い夢を。」

ヒカルにそう言われて、リビングを出た。

部屋に行くと、小夏は「おやすみ」と言って、早々と眠ってしまった。  
よっぽど疲れていたらしい。

桃はシャワーを浴びて、もうひとつのベッドにもぐりこんだ。

なかなか寝付けない。  
ヒカルにかかってきた電話の事が気になっていた。  
電話を終えて帰ってきたヒカルの様子がおかしかったからだ。

ぎゅっと目をつぶる。

ヒカルが笑って手招きしている。  
桃は嬉しくて、ヒカルの方へ駆け寄って行った。  
ヒカルが手を伸ばす。  
桃がその手を取ろうとした時、別の女性がヒカルの手を取って、二人でどこかへ行ってしまった。  
。

「待って！」

桃はそう言って、目を覚ました。見渡すと、薄暗い部屋にわずかに月の明かりが差していた。  
隣では、小夏がすやすや眠っている。

「夢...？」

時計を見ると、もう深夜だった。

「喉、乾いた...。」

何か飲もうと1階に降りると、リビングにSHUがいた。

「あれ、桃ちゃん、どうしたの？」

「あ、ちょっと喉が乾いちゃって...」

「じゃあ、ちょっと待ってて、お茶でいいかな？」

「すみません...」

「俺もね、なんだか眠れなくて、1杯飲んでたんだ。」

SHUの前にウィスキーのグラスが置かれていた。

「どうぞ。」

そう言って、SHUが温かいお茶を淹れてくれた。

「ヒカルはあっちの部屋で寝てるよ。」

そう言って、SHUが隣の部屋を指差した。

桃は何と言ったらよいかわからず、「そうですか。」とだけ答えた。

「今日、桃ちゃんのピアノを初めて聴いたけど、やっぱりクラシックをずっとやってきた子は違うよなあ。小夏ちゃんのを聴いた時も鳥肌が立ったけど。桃ちゃんの演奏は、小夏ちゃんとはまた違う魅力があるよ。」

「ありがとうございます...」

桃は急に褒められて、少し恥ずかしくなった。

「ヒカルの事が好きなんだね。」

「え？」

「演奏に恋する女の子の気持ちが込められていたよ。」

桃はそういう風に意識した事が無かったので、驚いた。

以前、レッスンの先生に「ピアノは恋をしている時と、そうでない時、表現に差が出ます。」

と言われたことがあった。

(そういう事なのかな?)

とぼんやり桃は思いながら、SHUに聞いたかった事を思い切って聞いてみた。

「あの...ヒカルってSHUさんに詞を書いてるんですね。」

'涙の跡'は、別れの曲だ。

ヒカルもこういう恋愛をしてきたのか...

もしそうでも、過ぎた事なのに、桃は何故か気になっていた。

「あ あ、結構前から作詞をやってもらってるんだ。ヒカルはね、学生時代から自分が感じた事を自分の言葉でメモしていてね、無理言ってそれを見せてもらった事があるんだよ。俺、感動しちゃってさあ。それで時々書いてもらってるんだよ。あ、でもこれは世間には公表してないからね。」

「あ、はい。言いません...」

「俺もヒカルも、桃ちゃん達よりは、少しだけ恋愛も経験してる。」

桃はSHUに聞いたかった事を見透かされた気がした。

「今のヒカルをそのまま見てやってよ。経験はその人の人生そのもの、その上に今があるんだよ。それに、あのブレスレット...」

「ブレスレット...?」

「ヒカルがしてる皮のやつ。桃ちゃんがクリスマスにプレゼントしたんでしょう?」

「あ...そうです。」

「年末にテレビ局でヒカルに会ったんだけど、すごく嬉しそうに見せびらかされたよ（笑）」

「そうなんですか?」



「そうだよ。ヒカルは桃ちゃんの事が本気で好きなんだな、ってその時思ったよ。」

SHUがウィスキーを飲み干した。

「さて、もう寝ないとね。明日はもう少し山の中まで行ってみよう。寒いけど、ドライブには最高だよ。」

そう言われて、桃は部屋に戻った。

もう、詞の事は気にしないでおこう。

『経験はその人の人生そのもの、その上に今がある』

SHUの言葉が、桃の心に残っていた。

翌朝、少しだけ早起きして、桃と小夏は朝食を作っていた。

「おはよー...あれ、サンドウィッチ？」

「SHUさんおはようございます。食材勝手に使っちゃいました。」

「いいよいいよ、おー、うまそうだ。ありがとう。」

少ししてヒカルも起きてきた。

「おはよう、食べるでしょう？」

桃の言葉にヒカルが笑顔で頷いた。

SHUもヒカルも、夜から仕事があるというので、この日は昼過ぎまで冬の山の自然に触れて楽しみ、早めに帰宅した。

「送ってくれてありがとう。写真できたら、連絡するね。」

「うん、楽しみにしてる。」

桃は自宅の前で、ヒカルと別れた。

昨晚、SHUと話せた事で、桃の心のモヤモヤはなくなり、ヒカルとこうして過ごせる事を、とても幸せに思っていた。

その年の冬は寒かったが、桃の心は暖かかった。

ヒカルとは、うまくいっていたし、ヒカルの自宅に行く事も増えていた。

先日テーマパークに行った時には、ヒカルがファンに気づかれてしまい、慌てて桃は他人のフリをしなければならなかった。

そんなドキドキする恋愛も、ヒカルがいつもフォローしてくれていたもので、安心していた。

学校の勉強もはかどり、桃は卒業演奏会の練習も順調だった。

「小夏はね、今年度卒業生の首席になったの。だから、卒業演奏会で、大学生のオーケストラを従えて、ピアノ協奏曲を弾くんだよ。」

「へー！小夏ちゃんすごいな。」

「うん、私も楽しみ。」

桃は時計を見た。

「それじゃあ、今日はそろそろ帰るね。楽譜を買って帰るから、電車で。」

「え？今日は休みなんだから、楽器屋も一緒に行くし、送って行くけど？」

「ううん、たまには電車で帰る。せっかくの休みなんだし、今日はゆっくりして。」

「桃ちゃん...、いい彼女だなあ...」

「何言ってるの（笑）じゃあ、またね。」

そう言って、桃はヒカルのマンションを出た。

いつもの楽器屋に寄り、目当ての楽譜を探す。

楽譜を買い、自宅に戻って卒業演奏会で弾く、リストの、パガニーニ大練習曲の新しい譜面を開いた。

卒業演奏会ではこの中の、第6番を弾くことになっている。  
桃にとっては、とても難曲だ。

もちろん、練習は既にしてはいたけれど、ずっと母の楽譜で練習をしていた。  
母もまた、栄星高校の卒業演奏会で、この「パガニーニ大練習曲」を弾いていた。  
桃の父はその年の首席だったらしい。

母が高校の卒業演奏で弾いたこの曲を、どうしても同じステージで弾きたかった。

自分の楽譜を新たに買ったのは、桃の人生を楽譜に刻みたかったからかもしれない。

新しい楽譜に向き合い、練習を始めた。

「やっぱり難しいな...」

時々、くじけそうになったが、母と同じ曲を弾きたいという想いが桃を支えた。

「頑張ろう...」

自宅の防音室にこもり、桃は深夜まで練習を続けた。

翌朝、学校へ向かう途中、ヒカルから携帯に着信があった。

「もしもし、ヒカル？おはよう。朝から電話なんてめずらしいね？」

「桃ちゃん、ごめん！」

ヒカルは、いきなり桃に謝った。

「どうしたの？」

少し間を置いて、ヒカルが話し出した。

「今朝早く、所属している事務所に呼ばれたんだ。写真を見せられたよ。桃ちゃんの。昨日、マンションから出る所を週刊誌のカメラマンに撮られてた...。」

「うそ！」

昨日は、そんな事には全然気が付かなかった。

「ずっと、マンションを見張っていたらしい。最近桃ちゃんが頻繁に出入りするようになったし、マークしていたみたいなんだ。今週発売の週刊誌に載るらしくて...ほんと、ごめん。もっと注意してあげるべきだった。」

「ううん、...でも、これからどうなるの？」

桃は不安になって聞いた。

「うん...俺は全然かまわないんだ。桃ちゃんが良ければ、素直に話したって良い。でも事務所が...」

「事務所が？」

「『二人一緒の所を撮られたんじゃないし、否定しろ』って...。もちろん、拒否したよ。でも、『今スキャンダルを起こして、新しいCMもなにもかも、棒に振るつもりか？』って...」

「そうなんだ...。私...私はどうしたら良いかわからない。」

「認めれば、桃ちゃんの想像以上に迷惑をかけてしまう事になると思う。だから、今回は...」

「うん...」

「俺の気持ちとしては、やっぱりどうしても、否定はできないんだ。だから、沈黙を通そうかと...。時期が来たら、素直に話そうと思ってる。」

「うん...でも、これまで通り、付き合っているんだよね？」

「もちろん気持は変わらないよ。ただ...」

「ただ？」

「しばらくは、会わない方が良くと思う。きっと、桃ちゃんの家の方にも週刊誌が行ってると思うんだ。」

「そうなの？」

桃は慌てて辺りを見渡した。それらしい人は見つけられなかった。

「わからないけど...。ほとぼりが冷めるまで、大人しくしていた方が良くと俺は思う。」

胸が痛かった。

最近、色々な事がうまくいっている、と感じていたのに、突然こんな事になるなんて...

ヒカルが芸能人だったという事を改めて実感させられた。

「わかった...そうしよう。」

桃はそう言うしかなかった。

「ごめんね、また電話するよ。何かあったら、桃ちゃんからも電話してね？」

「うん。じゃあ。」

桃はとりあえず学校に向かった。  
状況がいまいちつかめずに、不安ばかりがつのった。

「桃？どうしたの？顔色悪いけど。」

小夏が心配して聞く。

「うん...実は...」

桃は週刊誌の事を話した。

「え！？本当？それで？ヒカルさんは、否定するの？」

「否定はしないけど、その件について聞かれても話さないみたい...」

「そうなんだ...」

「もし認めてしまったら、どんな事になるのか、わからない...。今回は沈黙が良いのかも、って私もちょっと思ってるの。」

「きっと大丈夫よ、桃。ヒカルさんの気持ちは桃にあるんだし、良い方向にいくって！」

「そうだといいんだけど...」

週刊誌の発売日まで、桃は落ち着かなかった。  
幸いだったのは、自宅まで記者が来る、という事がなかった事くらいだった。



雑誌の発売日、桃は樹に本屋で買って来てくれるように頼んだ。

「姉ちゃん、ほら。俺はまだ見てないけど。」

「ありがとう。」

恐る恐るページをめくる。

「...！」

桃の姿がそこにあった。ただ、顔は隠されていた。  
桃の事は、『某私立高校3年の18歳Aさん』と書かれていた。

横から覗いていた樹が、

「これじゃ、他の人には、姉ちゃんだってわからないよ。」

と言ってくれた。

ヒカルのマンションから出て、楽器屋に寄った事なども書かれている。

「全然気が付かなかった...」

涙が出てくる。

「姉ちゃん...」

桃は雑誌を持って、自分の部屋に戻った。

携帯を取り、ヒカルに電話をしようと思ったが、やめてしまった。

その日の夕方の芸能ニュースにヒカルが出ていた。  
新しいCMの記者発表だった。

週刊誌の記事に関して、記者の問いかけには、答えなかった。

今日は、桃がプレゼントをしたブレスレットもしていない。

急にヒカルが遠く感じた。

桃は他の事はなるべく考えないようにして、卒業演奏の練習に専念する事にしていた。

そうしていないと、心が壊れそうだった。

大人しくしていた事が良かったのか、あれ以来あまり騒がれる事がなくなり、あの写真の高校生が、桃だという事にも、周りの人には気付かれなかった。

ヒカルとは相変わらず会っていなかったけれど、電話やメールはしていた。  
ヒカルの仕事も忙しそうで、日本中あちこち撮影で移動しているようだった。

桃はヒカルに会いたかった。  
今はダメだってわかっている。でも、もうこらえられなくなっていた。  
会えなくなってからは、いつもいつも不安だった。

— 会いたい。 —

桃は思わず、そう返信してしまった。

今日は何も手に付かない。

溜息ばかりついていたら、いつの間にか夜になっていた。

夜遅くになって、ヒカルから返信が来た。

— 明後日、SHUの家で会おう。  
SHUが部屋を貸してくれるよ。 —

「ヒカル...」

桃の目から涙が溢れた。

2日後、学校が終わった桃は、その足でSHUの自宅に向かった。  
マンション入口のオートロックの部屋番号を押す。

『はい。』

SHUの声だ。

「あの、桃です。」

『あ、待ってね。今開ける。』

扉が開いて、桃は中へ入った。

エレベーターに乗り込み、最上階へ行く。

(ヒカルはもう来てるのかな...)

緊張して、ドアの前で待った。

「こんにちは、桃ちゃん。久しぶりだね。ヒカルはまだだよ。」

リビングに通され、ソファに座った。

「お茶淹れるね。ヒカルが来たら、俺は外に出るから。」

SHUはそう言って、紅茶を淹れてくれた。

「ありがとうございます。SHUさん...ご迷惑かけてすみません。」

「いいんだよ、大変だったね。」

「私は...家にマスコミの人が来るって事もなかったし、大変だったって事はないんです...ただ...」

「ヒカルに会えなかったのが辛かったんだね。」

「はい...」

「マスコミもあれ以上に情報を持っていないみたいだし、すぐにこの報道はおさまるよ。」

「はい...」

「それにしても、ヒカル遅いなあ。」

約束の時間から40分が過ぎていた。

「仕事押してるのかな。」

更に20分経っても、ヒカルは来なかった。

その時、SHUの携帯が鳴った。

「あ、ヒカルからだよ...。もしもし？」

「え？桃ちゃんの携帯が繋がらない？」

桃はSHUがそう言うのを聞いて、初めて携帯を自宅に忘れてきたと気が付いた。

「それで、お前どこにいるんだよ。桃ちゃんずっと待ってるぞ。」

桃はSHUがヒカルと話すのを横で黙って聞いていた。

するとSHUが突然

「は！？なんだよ、どういう事だよ。」

と大きな声をあげた。  
桃の方をちらちらと見ている。

何かあったのだろうか、桃は気が気じゃなかった。

SHUが携帯を桃に渡した。

「も、もしもし？ヒカル？」

『桃ちゃん...、待たせてゴメン。』

「ううん...。でもどうしたの？」

SHUが部屋を出て行った。

『今日は行けなくなったんだ...。』

「どういう事？」

『ごめん...。本当は直接会って話さないといけないんだけど...、それに電話じゃ伝えるのが難しい。』

ヒカルが何を言いたいのかわからなかった。

「ヒカル、どうしたの？なんで来られないの？ちゃんと言ってくれないとわからない。」

『うん...。今日...また週刊誌に載ったんだ。』

「え！？だって、あれから会ってないし、うちにもマスコミの人なんて来てないのに！」

朝早くから学校に行き、そのままSHUの家に来た桃は、今日発売の週刊誌の記事をを全然知らなかった。

間を置いて、ヒカルが話し始める。

『違うんだ。桃ちゃん、良く聞いて。今回週刊誌に載ったのは、桃ちゃんとの事じゃない。』



ヒカルが言葉を選びながら話しているのがわかった。

『俺の...、前の彼女の事で...』

「え？」

桃は訳が分からなかった。

その時、SHUが1冊の雑誌を持って帰ってきた。  
コンビニに買いに行ったらしい。

桃は、ヒカルとの電話をつないだまま、奪うように雑誌を取った。

『桃ちゃん、ご...、お...もう...切れ...』

「え？なに？」

電波が悪いのか、そのまま電話が切れてしまった。

桃は急いで記事に目を通した。

「そんな...。...春山あすか？」

ヒカルの元恋人が春山あすかだと書いてある。  
小夏がSHUのオーディションを受けた時にすれ違った女優だ。

ヒカルと春山あすかが、よりを戻して、密会していた。  
更に、二人が学生時代の同級生だとも書いてあった。

「密会...？同級生...？元恋人...？」

「桃ちゃん...」

SHUが桃に遠慮がちに声をかけた。

「SHUさん、これってどういう事なんですか！？春山あすかと同級生？元恋人？」

SHUが間を置いて話し始めた。

「桃ちゃん、俺とヒカルとあすかは同じ高校に通っていたんだよ。もちろん、3人共まだ芸能界に入ってはいなかった。あすかは、卒業と同時にオーディションでドラマの役が決まって、そのまま女優になった。」

桃は色々質問したいのをこらえて聞いていた。

「ヒカルとあすかは、確かに付き合っていたよ。でも、あすかが上京する事になって、二人の仲は自然に離れていった。しばらくして、ヒカルもケンとコンビを組んで、芸能界に入る事になった。それであすかと再会したんだと思う。ただそれは、桃ちゃんと出会う前の話で、終わった事だと俺は思ってる。だから、今回の記事に関しては、俺もわからないんだ。」

「記事には、'よりを戻した'って...書いてあります...」

「そうだね...、でもヒカルにきちんと話を聞かないと。その記事だけを信じちゃいけないよ。」

「そうですね...」

そう言いつつも、桃の不安は大きくなるばかりで、また涙が溢れた。

「ヒカルときちんと話すんだよ？」

そう言って、SHUが桃の肩を優しく叩いた。。

SHUがタクシーを呼んでくれたので、桃は自宅に帰る事にした。

部屋に忘れた携帯には、ヒカルから何回も着信が入っていた。

ヒカルとあすかの事は、他の雑誌や、テレビのワイドショーでも大きく取り上げられた。

イケメンお笑いタレントのヒカルと、人気女優のあすかのスキャンダルは、とてもよいネタだったらしい。

その後、ヒカルから何度か電話があった。

『あの記事は、全てが事実な訳じゃない。』

ヒカルはそう言うけれど、桃は素直にその言葉を受け入れられずにいた。  
春山あすかと付き合っていたのは事実だったし、最近会ったのも本当らしかった。

『桃ちゃん、会って話したい。』

というヒカルの言葉は、なんとか理由をつけて避けていた。

その時、樹が桃の部屋をノックした。

「姉ちゃん？」

「ん？なに？」

「お客さんが来てる。」

「だれ？」

「下で待ってるよ。」

そう言うと、樹は自分の部屋へ行ってしまった。

「もう、だれよ...」

桃が玄関に降りると、そこにSHUがいた。

「え！？なんで！？」

「ヒカルに桃ちゃんを連れてくるように頼まれたよ。あいつ俺をなんだと思ってるんだ。」

SHUはそう言って少し笑った。

「...私、行きません。」

「ちゃんと話し合っていないだろうか？」

桃は黙っていた。

「ほら、早く。車停めてあるから。」

そう言うと、さっさと玄関を出て行った。

「ちょ、ちょっと待って下さい！」

桃が追いかけると、SHUが助手席を開けて待っていた。

「乗って。」

言われるがままにSHUの車に乗り込む。

「ヒカルも人使いが荒いよなあ。で、桃ちゃんは、なかなか頑固者だね（笑）」

「...。」

「ヒカルを避けていたって、何も前進しないよ。」

そう言って、SHUは車を走らせた。



「前にも言ったけど、ヒカルとあすかは終わってるんだよ。今回の記事がどうしてあんな事になってるかは、俺にもわからないけど...。」

「春山あすかみたいな綺麗な人と付き合ってた人が、急に私みたいな平凡な女子高生と付き合うなんて、きっと最初からおかしかったんです。」

SHUは黙って聞いている。

「ヒカルは...私との事は本気じゃなかったのかもしれない！」

桃はそう言ってから少し後悔した。

「桃ちゃん、本気でそんな事思っていないでしょう？そんな事、言っちゃダメだよ。あすかはあすか、桃ちゃんには桃ちゃん。比べてどうこう言う問題じゃないよ。それに...」

SHUが一呼吸置いてこう言った。

「桃ちゃんは、魅力的な女の子だよ。」

桃はずっと黙って乗っていた。  
しばらく走って、ヒカルのマンションに着く。

「桃ちゃんが逃げ出すといけないからな、上まで一緒に行くよ。」

そう言って、SHUがマンションへ入って行った。

ヒカルの部屋の前に着く。

SHUがインターホンを鳴らし、

「連れてきたぞー。」

とドアに向かって言った。

桃はうつむいて、ドアが開くのを待っていた。

ドアが開く。

顔を上げて、前を向くと、

「！」

玄関に立っていたのは...春山あすかだった。

「あすか、なんでここに...」

SHUが驚いて言った。

あすかの後ろにヒカルが見えた。

桃は、一瞬部屋の中の二人を見て、エレベーターの方に走った。

ヒカルの声で、

「桃ちゃん！」

と叫ぶのが聞こえたが、無視して走った。

急いでエレベーターに乗り込み、外へ出た。

「はあ、はあ...」

息が切れる。

「なんで...」

どうして、あすかがヒカルの部屋にいたのか、どうして今日、桃の事を呼んだのか、頭がパニックになって考えられなかった。

ただ、あすかがヒカルの事を学生時代の愛称「コウ」と呼んだのは聞こえた。

「桃ちゃん...」

振り返ると、SHUが立っていた。

「SHUさん、なんで...なんで...」

桃は泣きながら言った。

「ここじゃ目立つし、とりあえず、乗って。」

SHUの車の助手席に乗り込む。

桃は手で顔を覆って泣いていた。

SHUは黙って運転している。

そして、車はSHUのマンションの駐車場に着いた。

「上がって。」

SHUの部屋に通され、ソファに座った。

ここに来るのは3回目だ。

SHUが前回と同じミルクティーを淹れてくれた。

「少し落ち着いた？」

「SHUさん....、私、もう...」

「桃ちゃん、ごめん。あすかがいるなんて、知らなかった...。」

「私...もう、頭がぐちゃぐちゃで...。」

「桃ちゃん...。」

桃の携帯が鳴る。ヒカルからだ。

「出ないの？」

桃は黙っていた。

そのうち、着信音が聞こえなくなった。

SHUも桃も何も話さずに、長い時間が過ぎた。

「SHUさん、ごめんなさい、私、帰ります。」

「うん...大丈夫？送るよ？」

「ありがとうございます。でも、一人になりたいんです。」

「そう...。またいつでも来たらいいからね。」

「はい...。本当にありがとうございました。」

桃はSHUのマンションを出た。  
歩きながら考えてみたが、桃にはわからなかった。

ヒカルが今日何を話そうとしたのか、どうしてあすかがヒカルの部屋にいたのか。

考えれば考えるほどに混乱してきたので、桃は考えるのをやめた。

翌日、学校が終わってから、桃の足は、とあるホテルへと向いていた。

ドアをノックする。

「お父さん...」

「桃！？どうしたんだい？とにかく入って。」

「お父さん、今日はコンサートじゃないの？」

「ああ、今日は打ち合わせがあっただけだよ。」

父が紅茶を淹れてくれる。

「さ、飲みなさい。」

父が淹れてくれた紅茶が心に温かく沁みて、桃は泣いてしまった。

「桃、泣きたいだけ泣きなさい。」

父はしばらく黙ってそばにいてくれた。

泣きやんだ桃は、

「お父さん...何も聞かないの？」

と言うと、父が意外な事を言った。



「お母さんに聞いているよ。」

「聞いてるって!？」

「あー、その、なんだ。ヒカルっていうのか？私は海外にいたからあまり日本のタレントは知らないんだけど...」

桃は驚いた。

まさか父がヒカルとの事を知っていると思っていなかったし、母と連絡を取り合っているとも知らなかった。

「昔...」

父が急に話し始めた。

「私も同じような事があった。」

「え？」

「私がウィーンから帰国して、お母さんと再会した後に、私とお母さんは付き合うようになった。でも私はね、向こうのコンクールで賞を獲る事ができて、日本の楽団から客演依頼を受けたり、テレビに出たり、少しずつ名前が売れだした頃だったんだ。」

桃は黙って聞いていた。

「私も少し天狗になっていたんだよ。それで、マスコミに叩かれた事があった。お母さんの事もある事、ない事記事に書かれて、辛い思いをさせたと思う。でもね、桃。お母さんはじっと耐えてくれた。待っていてくれた。それがとても心強くて、私はもう一度演奏家としてやり直す事ができた。」

父は一呼吸置いて更に続けた。

「桃、信じる事は、決して無駄な事ではないよ。」

桃は、母にヒカルとの事を初めて話した日を思い出していた。  
母は驚いて話を聞いていたけれど、

'相手を信じる事。あなたは、しっかりヒカルさんを信じてあげて。'

と言っていた。

「お母さんには感謝しているんだ。」

父は遠くを見る目をして、そう言った。

ー あすかは考えていた。

ヒカルの家でSHUと来た、あの女の子が、週刊誌に載った女子高生なのではないか、と。

自分とヒカルの記事が出る前に、スクープされた女子高生。

紅葉の丘で見た女の子...

紅葉の季節に誕生日を迎えるあすかは、毎年あの丘でヒカルに祝ってもらっていた。

ヒカルと別れた後も、あすかは自分の誕生日に、あの丘に上っていた。

昨年も同様にあの丘へ行った。

そこにヒカルが来たのだ。

驚いて、駆け寄ろうとしたが、隣に見知らぬ女の子がいた。

一瞬、女の子に見られた気がして、あすかは、急いで丘を下りた。

田所 光（ヒカル）  
春山 あすか（あすか）  
金井 柊（SHU）

三人は、高校の同級生だ。

まだ光もあすかも高校生だった頃、二人は付き合い始めた。

初めは、柊があすかに想いを寄せていたのだ。

柊の横には、いつでも光がいて、いつも二人で行動していた。

ある日、柊があすかに想いがあると、光に伝えられた。

あすかは特に柊に想いがあったわけではないし、かと言って嫌いなわけでもなかったが、付き合い気はなかった。

柊にカラオケに誘われても、買い物に誘われても、なぜかいつも光が一緒だったので、三人はいつの間にか大切な友達になっていた。

自分が光に特別な想いがあると気付いたのは、数ヶ月経った頃だった。

それまで必ず三人で行動してきた学校の帰り道も、いつの間にかあすかと光の二人になっていた。

「コウ、私、コウが好き...」

告白したのは、あすかからだった。  
それから、二人は付き合いだした。

それでも、柊と光は仲が良かったし、あすかと柊も、特に気まずい関係にはならなかった。

卒業までは、何の問題もなかったし、幸せだった。

以前から、女優になる事を夢見ていたあすかは、卒業と同時に、ある映画のオーディションに合格し、上京する事が決まった。

光は、地元の大学に進学する事が決まっていた。

「コウ...離れても、想いは変わらないから...」

そう言って、あすかは上京したが、光との関係はいつの間にか離れてしまった。

数年経って、あすかが女優としてなんとかやっていた時、光がタレントになって、上京すると聞いた。

あすかは、素直に嬉しかった。また光とやり直せるかもしれない。

この数年、光の事を忘れた事はなかったが、忙しさと、今更、という思いがあり、連絡できずにいたのだ。

広いようで、狭い芸能界で、光と再会するのに時間はかからなかった。

とある番組のゲストとして、二人が呼ばれた事があり、その後二人で会う約束をした。

もともと嫌いで離れたわけではなかったのに、二人はまた、急速に近付き、付き合うようになった。

ただ以前と違うのは、芸能人同士、あまり派手に行動できない事だった。

あすかの誕生日だけは、なんとか時間を作り、あの丘へ上っていた。

光もあすかも、徐々に売れだし、お互いにとても忙しい日々が続いた。些細な事での喧嘩も増え、お互いを思いやれる心がなくなってきた。

「やっぱり俺達は、あの時に終わっていたんじゃないのか...。」

光にこう言われた時、あすかは反論できなかった。

「このままじゃ、大切な友人関係も壊す事になるわよね...。」

そう言って、あすかは、また光との別れを決めた。

それでも光への想いをなかなか断ち切れなかったあすかは、その次の年からひとりであの丘に上っていた。

そこで、光とあの女の子が一緒にいる所を見てしまったのだ。

寄りを戻したいという思いはもちろんもうなかった。でも、今まできちんと光と向き合った事があったのか？

きちんと話をした事があったのか？

このまま終わらせても次に進めないとあすかは思った。  
光に連絡を入れ、最後にもう一度だけ話がしたいと伝えた。

光には断られるかもしれないと思ったが、意外にも光は、話をしようと言ってくれた。

外では目立つので、ホテルの1室を取った。  
ホテルに到着すると、光のマネージャーがロビーにいた。

「あすかさん、あまり時間は取れません。」

マネージャーはそう言って、部屋に案内してくれた。

部屋に入ると、光がマネージャーに出て行くように頼み、仕事には遅れないと約束をした。

マネージャーが出て行ったので、あすかが話し始めた。

「コウ、あなたが...あの丘で私の知らない女の子といるのを見たの...」

「そう。やっぱり、あすかだったのか。」

光は、桃が見たという人影がなんとなく、あすかなんじゃないか、と思っていた。

「私たち、どうしてこうなっちゃったんだろうね...。」

「そうだな...。」

色々と話してみたが、答えは出なかった。

ただ、お互いに、もう恋人同士には戻れないという事だけは、よくわかった。

「今は、あの子の事が好きなのね？」

「大切にしたいと思ってる。」

「そう…。私はあなたとの事、後悔していない。それに、感謝してる。ありがとう…。さようなら。」

そう言って、あすかはホテルを出た。

そこを週刊誌に撮られてしまったのだ。



あすかは動揺した。

そんなつもりじゃなかったのに、自分が光と話したいと言ってしまった事で、こんな記事が出てしまった。

記事の中には、新作映画の決まっているあすかが、話題作りの為に、わざとヒカルのホテルに行ってスクープを作ったんじゃないか、と疑うものもあった。

仕事の合間、あすかの足は光のマンションへ向かっていた。  
光には誤解されたくない。その一心だった。

その日、桃を自宅に呼んでいたヒカルは、インターホンが鳴り、てっきりSHUが桃を連れてきたのかと思って、モニターを見たら、そこにあすかが立っていて驚いた。

「あすか？どうしたんだよ…。こんな時にここに来たら…」

「コウ、私…。」

そうあすかが言った時、柊があの子高生を連れてやってきた。

女子高生は光と自分の事を誤解しているのだろう、すごい勢いで行ってしまった。  
柊がその後を追い、あすかがエレベーターで下りた時には、二人とももういなかった。

卒業演奏会当日を迎え、桃は朝から落ち付かなかった。

「桃、いい？」

母が桃の部屋に入ったきた。

「今日はあなたにとって、とても大切な日よ。あなたの高校生としての卒業演奏会は、今日以外にないわ。どんな1日になるのかは、桃次第。今は演奏の事だけ考えなさい。」

「お母さん...。」

「大丈夫よ、きっと上手くできるわ。」

「ありがとう。あのね...」

「うん？」

「お父さんが...、お母さんには感謝してるって言った。」

「...そう。」

桃はその母の表情から、父の言葉を聞いてどう思っているのかが読み取れなかった。

「さ、いってらっしゃい。頑張っってね。お母さんも演奏会には行くからね。」

「うん、行ってきます。」

晴れていても外の空気はまだ冷たく、桃の手を冷やした。

自宅そばの公園まで来ると、桃は驚いて足を止めた。

「え!？」

そこに、帽子をかぶり、サングラスをしたSHUが立っていたのだ。

「おはよう。」

「ど、どうしてここに？」

「桃ちゃん、今日が卒業演奏会だって言ってたから...。」

「そ、そうですけど...。」

「えーと...、がんばってね。」

「は...はい...。」

「じゃ。」

「え?ちょっ...」

それだけ言って、SHUは行ってしまった。

桃はSHUの行ってしまった方向をしばらく呆然と見つめていた。

「SHUさん、なんだったの...。あ、急がなくちゃ。」

電車に乗り遅れそうになったので、桃は駅まで走った。

「桃、おはよう！」

小夏に声を掛けられて、桃は我に返った。

「あ、小夏、おはよう。」

「いよいよだね〜。」

「うん。小夏のコンチェルト楽しみだよ。しばらく小夏の演奏聴けなくなっちゃうけど…。卒業式が終わったら、すぐに発つんでしょ？」

今日の演奏会を終えれば、3年生は卒業式まで休みに入る。卒業式は、2週間後だった。

「うん。もう準備もできたし、あとは行くだけ！色々不安もあるけど、今は楽しみの方が大きい。」

「そっか。」

桃は笑顔で答えた。

ただ、今朝SHUに会った事は言わなかった。

今は演奏に集中したい。

今日という日を絶対に後悔の日にしたくない、その思いだけが桃を支えていた。

「みなさん、おはようございます。いよいよ卒業演奏会ですね。今日はこの3年間で学んだ事、感じてきた事を思い思いに表現してください。楽しみにしています。では、ホールに移動して下さい。」

担任にそう言われ、桃たちは一斉に席を立った。

他の試験と違って、卒業演奏会だけは、外からの観客も入れるようになっていた。桃の母が、小夏の母親と隣同士に座っているのが見えた。マスターの太一さんや、奥さんのより子さんも来てくれている。

桃は瞳を閉じて、順番を待った。

前の演奏が終わり、桃の番になる。

深く深呼吸をして、ステージに向かった。

ピアノの前に座り、もう一度呼吸を整えて、演奏を始めた。

演奏が終わるまでの数分間、桃は演奏以外の事を考えずにいた。これが、卒業演奏会である事すら、忘れて演奏していた。

最後の一音が終わり、少しの静寂の後、割れるような拍手が起こった。

桃はハッと客席の方を見る。

(あ...、そうか、卒業演奏会だったんだ...。)

桃は急に現実に引き戻されたような感覚になり、お辞儀をしてステージから降りた。

「桃！すごく良かった！！感動しちゃった！！」

小夏が涙目でそう言ってくれた。

「ありがとう...私...、あまり覚えてない...」

「そうなの！？本当にすごく良い演奏だったよ。あ、じゃあ私もスタンバイだから、また後でね。」

そう言うと小夏は、ステージの奥へ行ってしまった。

客席の生徒席に戻り、他の生徒の演奏を聴く。

『栄星音楽大学附属高等学校、今年度首席、佐倉小夏さんの演奏です。オーケストラは栄星大学管弦楽団、曲目は'グリーク ピアノ協奏曲イ短調です。』

大きな拍手とともに、小夏がステージに出てきた。

桃もステージを見つめる。

ティンパニの音がクレッシェンドに響き、小夏のピアノが導かれるように入ってきた。

小夏のピアノが素晴らしい事はこれまでも十分にわかってきていたつもりの桃だったが、今日の演奏はそれを上回るものだった。

桃は自然と涙がこぼれた。



桃、小夏、それぞれの母親は、TAICHI's cafeにいた。

「小夏ちゃん、本当に素晴らしかったわ。きっと今までの首席の中でも1番ね。」

桃の母が小夏に向かってそう言った。

「いえいえ、そんな...」

小夏が少し照れてそう答える。

「でもウィーンに行ってしまうとなると、幸子さんも寂しいわね。」

今度は小夏の母親に向かって言った。

「そうなのよ...。もちろん、娘を応援しているんだけど、オーストリアは遠いわ...」

小夏の母親が少し寂しそうな目でそう言った。

「桃、ウィーンにもきてね。」

小夏が桃に向かって言う。

「うん！絶対行く！」

その時、桃の携帯にメールが入った。

チラッと見てみると、なんとSHUからだった。

SHUの別荘に行った時、メールアドレスを教えてはいたが、メールが来た事はこれまで1度もなかった。

なんとなく、小夏の前でメールを開く事に躊躇し、そのまま携帯を鞆に入れた。

小夏たちに別れを言い、桃と母は自宅へ戻った。

桃は急いで自分の部屋に入る。

携帯を取り出し、メールを見た。

— 今朝は突然ゴメン。  
演奏会はうまくいったかな？  
何かあればまた話くらい聞くからね。 —

桃が携帯を見つめていると、突然着信が鳴り、びっくりして、携帯を落としてしまった。

着信はヒカルからだった。

桃は少し迷ってから電話に出た。

「もしもし…」

『もしもし！？桃ちゃん？よかった。出てくれた。』

「…。」

『今日は演奏会だったんだよね。どうだった？本当は聴きに行きたかったけど…』

「そんな事できるわけないもんね。」

桃は少し嫌な言い方をしてしまった。

『本当に聴きに行きたい気持ちはあるんだよ。それから…』

「そう？私はてっきりあすかさんと仲良くしてるのかと思ってた。」

『桃ちゃん…。あすかとは確かに付き合っていた事があったよ。でも、今は違うんだ。』

「じゃあ、どうしてあすかさんが家にいたの！？」

桃は我慢していた想いをセーブできなくなっていた。

「それに、あの詞だって、あすかさんとの事なんじゃないの！？別れてから大切さに気付いたって、まだあすかさんの事をまだ想ってるから書いたんでしょう！？」

『桃ちゃん...きちんと話さないか？電話じゃ...』

「話たくない！」

桃はそう言って電話を切ってしまった。

携帯の電源を切り、布団に投げつけた。  
涙がどんどん溢れてくる。

桃は家を飛び出した。

泣きながら街を歩いた。

桃は自分が上着も着ずに出てきた事に気が付いた。

「寒い...。」

情けなくて、また涙が出た。

桃が部屋にいない事に気付いた母からメールが入る。

桃は、

- ー 小夏に渡し忘れた物があるから
- ちょっと出てくる
- 遅くなるかもしれないけど、大丈夫だから ー

と嘘のメールを送った。

桃はマンションの前で足を止めた。

オートロックのインターホンを押す。

出ない。

「留守なんだ...。」

植込みに腰かけ、壁にかくれて寒さをしのいだ。

両腕で自分を抱きしめるように、小さくうずくまった。

何時間経っただろうか、タクシーがマンションの前で停まり、中から出てきた人物が驚いて桃に声をかけた。

「あれ！？桃ちゃん！？どうしたの？」

桃が顔を上げる。

「SHUさん...。」

桃はSHUのマンションに来ていた。

「とにかく入って！すごく冷たいじゃないか。」

「これ着て。温かい飲み物、何か用意するから待ってて。」

SHUが男物のパーカーを桃の肩からかけ、キッチンへ入って行った。

「すみません...。」

数分後、桃の前に温かいミルクティーが置かれた。

「びっくりしたよ。泣いてたの？」

桃の顔を見てSHUが言う。

「SHUさん...私、もうダメです。お父さんにもお母さんにもヒカルの事を信じなさい、って言われたけど...。どうしても疑ってしまう...あの詞だって、きっとあすかさんを想って...」

桃はそこまで言って、また涙をこらえられなくなっていた。

「！」

ふいにSHUが桃を抱きしめたので、パーカーが床に落ちた。

「SHUさん...！」

桃はその腕から逃れようとしたが、更に力強く抱きしめられてしまう。

「もう何も話さないでいいよ。泣きたいだけ泣いて。」

SHUが桃を腕から離し、更にこう言った。

「でも俺は桃ちゃんを泣かさない。笑顔の桃ちゃんが好きなんだ。」



「え?...」

SHUの言葉が、初めはよく理解できなかった。

「桃ちゃんが好きなんだ。」

SHUは改めて言い、桃をまた抱きしめた。

「しゅ、SHUさん...ちょっとまって下さい。」

桃は、今度はSHUの腕から逃れた。

「ごめん。」

SHUが桃に謝る。

「桃ちゃんがうちの別荘でピアノを弾いてくれた事があっただろう？あの時本当に感動したんだ。うまく言えないけど、小夏ちゃんのピアノを聴いた時とは違う感動だった。ヒカルの彼女だし、最初からそんなつもりがあった訳じゃないんだよ。でもね、何度か会って話をするうちに、俺は桃ちゃんの才能じゃなく、桃ちゃん自身に惹かれていった。」

桃は驚きを通り越して黙って聞いていた。

「今朝、桃ちゃんに会いに行って、俺の気持ちをはっきりわかったんだ。」

「SHUさん...。」

「桃ちゃんに悲しい顔をさせたくない...」

そう言って、SHUはまた桃を抱きしめた。  
ふんわりと、香水の良い香りがする。

桃は...そのままその腕の中で眠ってしまった。

ヒカルが笑って手招きしている。

桃は嬉しくて、ヒカルの方へ駆け寄って行った。

ヒカルが手を伸ばす。

桃がその手を取ろうとした時、別の女性がヒカルの手を取って、二人でどこかへ行ってしまった。

桃は目を開けた。

「桃ちゃん...？」

目の前にいたのはSHUだった。

また同じ夢を見たらしい。

「すごい汗だよ。それに少しうなされてた。」

桃はSHUの部屋のソファに寝かされていた。

ずり落ちた毛布を慌てて引き寄せる。

SHUが笑って、

「大丈夫だよ、何もしてない。桃ちゃん、ここの所、疲れてたんじゃない？すぐに眠っちゃったから。」

そう言った。

確かに、最近ヒカルのことと、卒業演奏の事で頭がいっぱいで、夜もろくに眠れていなかった。

「タクシーを呼ぶよ。今日はもう帰らないとね。」

SHUが電話をかけ、タクシーを呼んでくれた。

「SHUさん…。私…」

「ゆっくり考えてくれたらいいんだ。桃ちゃんの気持ちが落ち着くまで、ずっと待ってる。卒業演奏会も無事済んだんだし、今日はゆっくり眠って。」

そう言われ、桃はSHUのマンションを出た。

月明かりが、泣き疲れた桃の顔を照らしていた。

SHUは桃を送り出した後、ヒカルのマンションへ向かった。

「SHU...。おまえか。」

ドアを開けたヒカルがそう言った。

「話がある。」

リビングに通され、SHUはソファに座った。

「焼酎しかないけど。飲むか？」

「いや、いい。ヒカル、座ってくれ。」

「SHU、今日は悪かったな...。桃ちゃんを連れて来てくれって頼んでおきながら、あんな事になって...。」

SHUはそれには返事をせずに話した。

「ヒカル、悪いけど俺、桃ちゃんが好きだ。」

ヒカルが驚いてSHUを見る。

「あ？何の冗談だ。」

「冗談じゃねーよ。桃ちゃんが好きなんだ。桃ちゃんにもその気持ちを伝えた。」

「彼女に会ったのか？」

「泣いてたよ。お前が泣かせたんだ。」

SHUの声が少し荒くなった。ヒカルは黙っている。

「何とか言えよ、ヒカル。誤解だかなんだか知らねーけど、お前は桃ちゃんを泣かせてるんだ！俺は…」

ヒカルが顔を上げる。

「俺なら、桃ちゃんを泣かせない。」

SHUがヒカルの目を睨むようにして言った。

ヒカルはまだ黙っている。

「俺は、来年、アメリカに行く事になってる。」

SHUが今度は静かに言った。

「アメリカ？」

「向こうでデビューする話があるんだ。その後はしばらく滞在するつもりだ。何年になるかわからない。」

二人とも少しの沈黙の後、SHUが話を続けた。

「桃ちゃんが大学を卒業して...俺に気持ちがあれば、呼ぶつもりだ。」

SHUは桃に自分の気持ちを伝えただけで、桃の気持ちは全く聞いていなかったが、そう言わずにはいられなかった。

ヒカルは黙って聞いている。

「ヒカル、俺はもう二度と、自分から身を引く事はしない。あの時とは違うんだ。」

SHUは思い出していた。

高校生の時、SHUはあすかが好きだった。しかし、あすかはヒカルの事を想っていた。自分の想いを伝えても、叶わなかった恋。

ヒカルが口を開く。

「SHU、俺だって桃ちゃんを渡すわけにはいかないんだ。お前との...」

ヒカルがSHUを見て更に言った。

「友人関係が壊れてもだ。」



桃は、卒業式までの2週間を、ほとんどボーっとして過ごした。

あの日以来、ヒカルからも、SHUからも連絡はなかった。

それがかえって、桃に色々な事を考えさせた。

なんとなく、小夏にも言えないまま、卒業式を迎えてしまった。

「桃、これでもう高校生活も終わりだね。」

小夏の言葉に、桃が頷く。

「桃？どうしたの？元気ないけど...」

「うん...。あのね...。」

桃は思い切って、小夏に全てを話した。

小夏に隠し事をしたまま、別々の大学に行く事は考えられなかった。

「SHUさんが桃の事を？」

小夏がそう言った時、少し傷ついたような顔をした。

桃の胸がチクッと痛くなった。

「桃は...、どう考えてるの？」

「うん、もちろん、SHUさんに対してそういう感情はなかったから...。ヒカルとはあれから話してないの。」

とだけ桃は言った。

「そうなんだ。...ねえ、桃。」

「うん？」

「私...、SHUさんの事を少し好きになりかけてた。ファンとしてじゃなくて、男性として。でも...。SHUさんの気持ちを知る事ができたし、これで思い残すことなくウィーンに行ける。話してくれてありがとう、桃。」

「小夏...」

桃も、小夏も泣いていた。

「卒業式始まっちゃうよ、行こうか。」

そう言って、二人は講堂へ入って行った。

それから1週間して、小夏がウィーンへ発った。

桃は、飛行場まで見送りに行き、小夏が乗って行った飛行機が見えなくなるまでデッキで空を見ていた。

「桃ちゃん。」

ふいに後ろから呼ばれ、桃が振り向くと、そこにSHUがいた。

「SHUさん！ どうしてここに？」

「小夏ちゃんが... 今日発つってメールをくれたんだ。きっと桃ちゃん、見送りに来てるだろうと思って...。」

他の見送り客が、なんとなくSHUに気付き始めたので、桃は「移動しませんか？」と言ってSHUを連れだした。

SHUは自分の車で来ていた。

桃は助手席に乗り込む。

「小夏ちゃん、行っちゃったね。でも、これから色々な可能性が広がってるもんな。応援しないとね。」

「はい...。」

「桃ちゃんは、4月の入学式まで春休みでしょう？」

「はい、そうです。」

「じゃあ、バイトしない？」

「え？バイト？」

思いもよらないSHUの発言に桃は驚いた。

「俺が使ってるスタジオで、ピアノを弾く子を探してるんだ。」

「ピアノ？」

「例えばね、歌手が新曲を作る時に、何曲か候補のメロディーを作ったり、出来上がった曲のデモCDを作ったりするんだ。その演奏を桃ちゃんにお願いしたい。正式にCDが発売される時にはプロが演奏するから、桃ちゃんの演奏が世に出る事はないんだけど...」

「私にできるんでしょうか？」

桃は、少し興味があった。  
それに、高校を卒業したらアルバイトを探そうと思っていた。

「できると思ってるから、お願いしてるんだけどな？」

桃は少し考えて、

「やってみます、やってみたい！」

そう言った。

「OK、じゃあ連絡しておくから、週末から来れるかな？」

「はい、よろしくお願いします。」

「じゃあ、この話はまたスタジオでね。今日はどこにデートに行こうか。」

「デート!？」

桃はSHUがこんなに積極的な男性だとは思っていなかった。

「少し南に行けば、早めの桜が見られるかなあ？」

SHUは楽しそうに言い、車を走らせた。

車が海沿いを走る。

今日は少し暖かくて、風が気持ち良かった。

SHUは、思ったよりも良く喋る男だった。

会話も面白くて、ミュージシャンじゃなく、コメディアンなんじゃないかと思うほどだった。

桃は急にヒカルの事を思い出した。

テレビに出ている時と違い、温かくて、気持ちを落ち着かせるような話し方をするヒカル...

それは、桃の好きなミルクティーを飲んでいる時の気持ちと似ていた。

そんなヒカルの話し方にも、桃は惹かれて行ったのだ。

「桃ちゃん？どうかした？」

桃が急に黙ったので、心配してSHUが声をかけた。

「あ...、いえ、ごめんなさい。」

SHUはそれ以上何も聞かなかった。

「あ、ほら、桜。まだつぼみだなあ。」

車を停めて、桜並木を少し歩いた。

きっと、満開の頃にはとても美しいだろうと桃は思った。

「あ、こっちは桃の花だよ。これもつぼみか...」

「ほんとだ...」

「桃ちゃんは、良い名前を付けてもらったね。もしかして、今月誕生日？」

「いえ、誕生日は来月なんです。両親が旅行に行った先で綺麗なピンク色の桃が満開で、もし女の子ができれば、こうやって皆に愛される桃の花のような子になってほしいって願っていたそうなんです。その1年後、ちょうど桃の季節に私は産まれました。」

「へえ～！すごいな。」

また少し歩く。

もう、桃の好きな季節がすぐそこまでやってきているのに、今年はなんだかいつもと違う想いでいた。

SHUが黙って、桃の手を取った。

桃も、特に抵抗せずにそれに従った。二人は手をつないで並木道を歩いた。



その週末、桃はレコーディングスタジオにいた。

「こちら、朝田桃さん。栄星高校を出て、栄星音大への進学が決まってる。まあ、とにかく演奏を聴いてよ。」

SHUが音楽プロデューサーの福田という人に紹介してくれた。

「朝田さん、よろしく。早速だけど、これ弾いてみてくれる？」

桃は1枚の楽譜を渡された。

「じゃあ、1時間後、またここに来るから。譜読みしておいてね。」

そう言うと、福田は行ってしまった。

「しゅ、SHUさん、いきなりこんな...。」

こんなテストみたいな事があるなんて、桃は聞いていなかった。

「大丈夫、大丈夫。そんなに難しくないよ。ほら、時間無いから練習して。俺も外にいるよ。」

SHUもスタジオから出て行ったので、桃はピアノの前に座り、楽譜を開いた。

確かに、そんなに難しい曲ではなかったが、桃は必死で楽譜を読んだ。  
これが上手くできなかつたら、この話は無しになるのだろう、というプレッシャーもかかった。

1時間後、約束通りプロデューサーがやってきた。

「じゃ、やってみてくれる？」

それだけ言って、福田はソファに腰かけた。  
その後ろにSHUが立っている。言葉は発しなかったが、口が「がんばって」と言っていた。

桃は深呼吸をしてピアノの前に座り、指を鍵盤の上に置いた。

桃が演奏を始めると、書類を見ながら聴いていた福田の顔が、桃の方を向いた。  
もちろん、桃はそんな事には気がつかなかった。

演奏が終わり、福田の方を見る。  
福田もまた、桃を見つめたままだった。

「あの...。」

たまらず、桃が福田に声をかけた。

「SHU、こりゃ、すごいな。」

福田はそう言った。

「でしょ？俺の耳に間違いはないよ。」

SHUが'どうだ'という顔で笑った。

「小夏ちゃんの時もすごいと思ったけど、これまた、感動した。」

「あの...小夏をご存じなんですか？」

「福田さんはね、'涙の跡'のプロデューサーでもあるんだよ。」

「そうなんですか...」

「よし、決まりだ。朝田桃ちゃん、よろしく。」

プロデューサーの福田が桃に右手を出して握手を求めてきたので、桃は合格の意味だと受け取った。

「よろしくおねがいしますっ。」

その日から早速桃には仕事があった。  
新人歌手のデモCDを作るというものだった。

「楽譜が読めない新人には、こうやって伴奏と他の人の歌声が入ったCDを渡して覚えてもらうんだ。」

桃には全てが新鮮で、楽しいものだった。  
仕事もかなりあり、桃は朝から晩までスタジオにいる日もあるほどだった。

ある日、桃はプロデューサーの福田に呼ばれた。

「桃ちゃん、今度テレビの仕事があるんだけど、出てみない？ちょっと映る程度だけど。」

テレビドラマのワンシーンで、ピアノを弾く役だという。

「ほんとですか！？やってみたいです！」

「じゃあ、早速話つけておくから。これが楽譜で、ここに詳細が書いてあるから、目を通しておいてね。」

「ありがとうございます。」

渡された用紙には、集合時間、撮影場所、服装などが書かれていた。

撮影当日、桃は指定された黒いドレスを持ち、少しお化粧をして収録スタジオに出かけた。

スタジオ内の待ち合わせ場所に行くと、スタッフのひとりが、桃を楽屋に案内してくれた。

（わぁ...楽屋まであるんだ。）

桃は内心、ドキドキだ。

「撮影が少し押してまして、朝田さんの出番が予定より遅くなっています。もうしばらくお待ちください、すみません。予定時間は...」

スタッフは、桃に出番予定を伝えてから、弁当を持って来てくれた。

「すみません、ありがとうございます。」

桃は、主人公たちが出掛けたピアノバーで演奏しているピアニストの役だった。もちろん、役名も何もない、顔も映るのか分からない程度の役だ。

楽屋にいるのも退屈してきたので、桃は部屋から出てみる事にした。

白い廊下に、白い壁。  
そこにずらりと、楽屋がいくつも並んでいた。

そこで、桃は見つけてしまった。

'ミドコロ ヒカル様 ケン様'

と書かれた楽屋を。

桃は思わず、その前で足を止めてしまった。

(今、中にヒカルがいるの?)

その時、楽屋のドアがガチャッと開いて、中から人が出てきた。  
桃はびっくりして、後ろに飛び退いてしまった。

中から出てきた人物が、

「あ、ごめんなさい。」

そう言って、桃に謝った。

桃はまだ心臓がバクバクしていて、動けずにいた。  
不思議に思った相手が、

「えーと、どこかでお会いしましたか？」

と言った。  
その人の顔をよく見ると、ヒカルの相方のケンだった。

「あ、え、あ、あのあの、、、いえ...、こちらこそ、す、すみませんでした。」

桃はしどろもどろで、答えた。

すると中から

「おい、ケン、どうしたんだよ？」

ヒカルの声がした。

卒業演奏会の日、電話が来て以来のヒカルの声。  
桃は思わず逃げそうになったが、足が動かなかった。

中から出てきたヒカルが、桃を見て、

「桃ちゃん！？どうしてここに！？」

そう言って驚いている。

ケンは、

「桃ちゃん？ああ、あの桃ちゃんか。こんな所で会うとは...。」

そう言って、桃を見て、ヒカルを見て、どこかへ行ってしまった。

ヒカルと二人になった桃は、何を話したらよいかわからず、

「あ...、あの、今日は撮影で...。」

と言った。

「撮影？」

「ドラマでピアノを弾く役を頼まれて...。」

「へえ。学校にそういう話が来るの？」



桃は何と答えたらよいかわからず、少し黙ってしまった。

「桃ちゃん、入って。まだ時間あるでしょう？」

そう言って、桃を楽屋に入れた。  
桃もそれに従った。

「桃ちゃん、会いたかった。それと、本当にごめん。あすかの事…。きちんと話したかったんだ。」

桃はまだ黙っていた。

「あすかとは、本当にもう何もないんだ。家に来たのも、あの記事の事を話しに来ただけだよ。誤解させてごめん。」

「...そう。」

桃はまだ聞きたい事があった。

「じゃあ、あの詞は？」

‘涙の跡’の事を聞きたかった。

「うん、あの詞はね、だいぶ前に書いたものなんだ。仕事が忙しくて、恋愛がうまくいかない時期があって、その時に。」

「あすかさんの事なのね？」

「そうだね、そうかもしれない。でもね、桃ちゃん。」

「うん？」

「俺...桃ちゃんに元気づけられてたんだよ。」

「どういう事？」

「桃ちゃんの家そばの公園...あそこに行くのが好きだったんだ。そこへ行く途中、桃ちゃんの家の前を通る。」

「...。」

「その時にいつも、窓からピアノの音が聞こえていた。もちろん、その時はどんな人が弾いているのかも、全然知らなかった。うまく言えないけど、俺はその音に惹かれていた。聴いてて涙が出たよ。最初は公園に行くのが目的だったけど、いつの間にか、そのピアノが聴きたくて、あの道を通るようになった。」

「...。」

「そのうちに俺は、以前の恋愛をふっ切る事ができた。そして、桃ちゃんとあの公園で初めて会った日、ピアノを弾いていた子が、朝田桃ちゃんという女の子だって知ったんだ。」

「そうだったの...。」

桃は口を開いた。

「もったきちんと話すべきだった。ごめん。俺が悪かったね。」

「ううん...」

「もう一度、やり直してくれないか？俺...、桃ちゃんが好きなんだ。」

「ヒカル...。」

その時、ヒカルが桃を抱きしめた。  
桃が持っていた楽譜や、コピー用紙バラバラと床に落ちた。

「ごめん」と言って、それを拾い上げたヒカルが、封筒に書かれた会社名を見て、

「これって、SHUが使ってるスタジオじゃないのか？」

と聞いた。

「うん...今ここでアルバイトしてるの。この撮影も、そこのプロデューサーさんが紹介してくれて...」

ヒカルがまっすぐに桃を見た。

「あいつの事が好きなのか？」

そう聞いた。

「私は…」

ヒカルのまますぐな視線に耐えられなくなり、桃は視線を逸らしてしまった。

その時、ドアがノックされ、「ミドコロさん本番です！」とスタッフから声がかかった。

ヒカルはまだ桃に何か言いたそうだったが、

「また、今度話そう。」

そう言って、収録に行ってしまった。

桃もまた、自分の楽屋へ戻った。

4月。

桃は大学生になっていた。

SHUの紹介してくれたアルバイトは、週末と、学校の早く終わる日だけ行く事でOKが出たので、そのまま続ける事にした。

桃は今日で、19歳になった。

ウィーンの小夏から、朝メールが来ていた。

桃の誕生日を忘れる事無く、お祝いのメッセージを送ってくれたのだ。

学校の帰り、桃はアルバイトに向かった。

スタジオに到着すると、皆が一斉に「おめでとう」と声をかけてくれた。

大きなバースデーケーキも準備してくれ、SHUからは大きな花束をもらった。

「嬉しい！こんなに大勢の人に祝ってもらうのは初めてです！ありがとうございます。」

桃は素直に嬉しかった。

「桃ちゃん、プレゼントがもう一つあるんだよ。」

プロデューサーの福田が桃に言う。

「え？なんですか？」

「実は...、今度デビューする歌手のピアノを桃ちゃんに弾いてもらいます！」

一斉に拍手が起こった。

「え？」

「デモじゃないよ、発売されるCDの演奏を桃ちゃんがするんだ。」

今度はSHUが言った。

「うそー！」

「桃ちゃんとは正式に契約させてもらうよ。いいね？」

福田が言う。

「ありがとうございます！！嬉しいです！！」

桃は、今のアルバイトをしているうちに、プロの演奏家もいいな、と漠然と想着てきている所だった。

「これからはプロとして見るから。厳しいよ？」

「頑張ります！！わー、嬉しい。」

「学校との両立は大変だと思うけど、がんばって。」

SHUがそう言ってくれた。

桃は、夢を見ているのかと思った。

でもこれは現実。

桃の心が躍った。



大きな花束を抱え、駅へ向かって歩いていると、見なれた車が桃の横に停まった。

「ヒカル...。」

「ずいぶん大きな花束だね。さあ、どうぞ。」

そう言って、ヒカルは助手席を開けた。

「バイト先でもらったのかな？」

「うん...」

とだけ、桃は答えた。

「お誕生日おめでとう。今日はお祝いだよ。」

そう言って、ヒカルは車を走らせた。

「お母さんには連絡したから。」

「え？」

「今日は、お嬢さんをお借りします。'ってね。」

「お母さんなんて？」

「'よろしく願います。'そう言ってたよ。」

「...。」

「って事は、今日は帰さなくていいのかな...。」

ヒカルが前を見て運転したまま、言った。

桃は返事ができなかった。

「冗談、冗談。さて、まずは夕食を食べに行こう。」

ヒカルの予約していたレストランは、とてもお洒落なレストランの個室だった。

次々と美味しい料理が運ばれてくる。

「来年の誕生日には、一緒にお酒が飲めるね。」

ヒカルが何気なくそんな事を言った。

ヒカルの腕には、クリスマスに桃がプレゼントしたブレスレットがつけられている。

それを見て、桃は何故だかホッとした。

食事が終わり、ヒカルが、

「うちにくるか？」

そう言った。

桃は少し考えて、

「うん。」

と答えた。

久しぶりに来る、ヒカルの部屋。

何も変わっていなかった。

「桃ちゃん...。」

そう言うと、ヒカルが桃を後ろから抱きしめた。

桃はドキドキして、動けなくなった。

ヒカルが桃の頬にキスをする。  
ヒカルの息が桃の首筋にかかる。

桃のドキドキが最高潮に達した時、部屋の明かりがバチンと一斉に消えた。

「あれ？」

暗闇にヒカルの気配が動いているのがわかる。

「ブレーカーじゃないな...、停電だ。」

「え？停電？」

「外を見てみなよ、この辺り全部真っ暗だ。」

「ほんとだ...。」

「こんな時に...、くそっ。」

そう言うと、二人は笑った。

ヒカルが懐中電灯をつけ、ろうソクを持ってきた。

ろうソクに柔らかい火が灯った。

「こういうのも雰囲気いいね。そうだ、ケーキを買ってあるんだよ。」

ヒカルが冷蔵庫から小さなケーキを持ってきた。

真ん中に砂糖細工のグランドピアノが置かれ、チョコレートのプレートには、

'Happy Birthday Momo'と書かれていた。

「わー、すごい。可愛い。」

ケーキにもロウソクを灯し、桃はふうっと息を吹いて消した。

「誕生日おめでとう。」

ヒカルはそう言ってキスをした。  
さっきの事もあり、桃は少し身構えてしまった。

「桃ちゃん、何もしないよ。そんなにビクビクしないで（笑）」

ヒカルが毛布を持ってきた。

「今日は少し寒いな。電気がつくまでこれで。」

そう言うと、ヒカルは1枚の毛布を桃と自分にかけて。

同じ毛布にくるまれた二人の距離はとても近く、暖かく、桃はまたあの安心感を覚えていた。

（この安心感に惹かれていったんだった。）

桃はヒカルと初めて会った頃を思い出していた。  
とても、温かく、柔らかい話し方をするヒカル。

「それから、これ。」

ヒカルが小さな箱を取り出した。

「プレゼント。」

「ほんと？ありがとう。」

リボンを解いて、箱を開ける。

箱の中には、腕時計が入っていた。

「綺麗な時計！」

「桃ちゃんいつも時計してないだろう？」

「あ、そういえば、いつも携帯で時間を見てたから...。」

「バイトもしてるんだし、時間を気にする事も多くなると思って。」

「ありがとう。嬉しい。...あのね、ヒカル。」

「うん？」

「そのバイトなんだけど、正式に契約になって、今度私の演奏で新人の歌手が歌を出す事になったの。」

「え？それって、桃ちゃんの演奏がCDになるって事？」

「うん。そう。」

「それはすごい！おめでとう。良かったね。」

「ありがとう。」

その後も二人は毛布にくるまって、話した。  
いつの間にか、停電も復旧し、部屋に明かりが戻っていた。

桃は感じていた。



やっぱりヒカルの事が好きなんだ、と。

あすかの事で、色々意地になっていたけれど、気持ちは離れていなかった。

「じゃあ、家まで送るよ。」

ヒカルが急にそう言ったので、桃は、

「え？」

と言ってしまった。

「あれ？泊まりたいの？」

冷やかすようにヒカルが言う。

「ち、違うけど！」

桃は真っ赤になってしまった。

「可愛いなあ。」

そう言って、ヒカルがもう一度桃を抱きしめた。

「俺だって本当は帰したくないよ。でも...大切にしたいんだ。」

「ヒカル...。」

(SHUさんに私の気持ちを伝えないと...)

ヒカルの車が自宅の前に着くと、母が中から出てきた。

「こんばんは、ヒカルさん。」

「こんばんは。遅くまで申し訳ありません。」

「娘を送って下さってありがとう。ちょっとお時間あるかしら？」

「あ、はい...大丈夫ですが...。」

「じゃあ、上がって。」

ヒカルも桃も訳が分からず、とりあえず言われるがままに家に入った。

リビングのドアを開くとそこに桃の父がいた。

「お父さん!？」

桃は驚いて大きな声を出してしまった。

「ああ、桃。お誕生日おめでとう。」

そう言うと、父はヒカルを見た。

ヒカルはハッと息をのみ、

「こ、こんばんは、初めまして。田所光です。」

そう言って、頭を下げた。

ヒカルが緊張しているのを見るのは初めてだった。

「ヒカルさんも桃も突っ立ってないで座って。」

「お母さん、これってどういう事...？」

父が口を開いた。

「桃、樹、お父さんとお母さんは、また一緒にやっていこうと思ってるんだ。」

「え!？」

桃と樹が同時に叫んだ。

「今まで、お母さんやお前たちに寂しい思いをさせたと思う…。でも今度こそ、家族みんなで幸せになりたい。お母さんも同じ気持ちだよ。…二人とも、賛成してくれるか？」

桃は間髪入れずに言った。

「もちろん!大賛成!!ね?樹。」

「うん。俺も。」

「ありがとう。私は今年中は海外で公演があるから、それが終わったら日本に戻ってくるつもりだ。それまで、お母さんを頼むよ。」

「これまでも三人でやってきたんだもん。今年いっぱいくらい、大丈夫。今年は最高の誕生日!!」

桃は信じられない思いだった。

「それで、光君。」

父が急にヒカルに向き直った。

「はい。」

ヒカルが緊張して答える。

「私が偉そうに言える事じゃないかもしれないんだが…。桃をよろしくお願いします。」

「お父さん…」

桃は驚いて父を見た。

「はい、大切にします。」

ヒカルがそう答えた。

父がヒカルに向かって頷いた。

「それと、桃。」

父が桃の方を見た。

「光君を信じて、ついて行きなさい。お父さんとお母さんは少し回り道をしてしまった。お前にはそんな想いはさせたくないんだよ。ゆっくり愛を育て、幸せになりなさい。」

「お父さん…。」

桃は涙が出た。

「お前は昔と変わらず泣き虫だな。」

そう言うと、父が桃の頭をなでた。  
すると、不思議と気持ちが落ち着いてきた。

(そうだ...ヒカルの手は父の手に似てるんだ...。)

桃はそんな事を考えていた。

数日後、桃は音楽スタジオに向かった。

SHUがアルバムのレコーディングをしている。  
桃はSHUの休憩を待って、スタジオを訪ねた。

「あれ、桃ちゃん。今日は休みでしょう？」

「はい、そうなんですけど...。」

「何か話があるのかな？」

レコーディングスタッフが外へ出て行ったので、桃は話し始めた。

「私、誕生日にヒカルと会ったんです。」

「...うん、それで？」

「私、やっぱりヒカルの事が好きなんです。だから...。」

桃はSHUに紹介してもらったこの仕事も辞める覚悟で来ていた。

「俺は、フラれるのか？」

SHUが少し悲しそうな顔で笑った。

「ごめんなさい。本当に親切にしてくれたし、感謝しています。」

「...わかったよ。でも、ここは続けるんだ。それが俺を振る条件。」



「SHUさん...。」

「桃ちゃんをここに紹介したのは、俺の個人的な想いがあったからじゃない。桃ちゃんの才能を見込んでの事だ。それは断言できる。」

「...ありがとうございます。」

SHUは、いたずらっ子のような顔をして、更に続けた。

「それに、ヒカルが嫌になったら、いつでも俺のところに來たっていいんだよ。」

「SHUさん...。」

「あはは、冗談だよ。あ、半分本気かな。じゃあ、俺、まだ歌入れあるから。」

「あ、はい。お忙しいところすみませんでした。それじゃ...。」

桃はスタジオを出て、その足でヒカルのマンションに向かった。

ヒカルは仕事で留守だった。

それでも桃は、普通に部屋に入り、普通に食事を作ってヒカルの帰りを待った。

何時間かして、ヒカルが帰宅した。

「桃ちゃん来てるの?...あ、今日は和食だ♪」

「おかえり。お母さんに習った煮物...。美味しいといいんだけど。」

「うまい！いつでもお嫁さんになれるね。」

ドキっとした。ヒカルは何でもない顔で食事を続けている。

「桃ちゃんのお父さんは、いつまで日本にいるの？」

「日本は4月いっぱい、その後はウィーンに行くみたい。年末にはまた日本に帰って来て、それからは日本で暮らすらしいよ。」

「それでいよいよ、一緒に住み始めるんだね。」

「うん。」

「そっか、楽しみだね。」

ヒカルは「うまい、うまい」と言って、食事を全部たいらげた。

食事が終わると、ヒカルが少し真面目な顔で話し始めた。

「今度ね、お笑いコンテストがあるんだ。それに出ようと思ってる。」

「お笑いコンテスト？」

「うん、テレビの企画なんだけど、ちゃんと予選からあって、放送は決勝だけ。」

「予選は見に行けるの？」

「うん。普通にお客さんを入れてやるんだよ。」

「私、見に行きたい。」

「なんだか恥ずかしいなあ。でも見に来てくれたら嬉しいよ。」

「客席からこっそり応援しとく。」

桃は、ヒカルのステージを生で見た事がなかった。

「すごく楽しみ♪」

「こっちは大緊張だよ...」

「大丈夫、絶対大丈夫だって。」

「そうかな？頑張るか。」

「頑張ってる♪」

その日も遅くまでヒカルの家にいた。

桃はまた以前のような幸せを感じる事ができていた。それ以上かもしれない。

今度こそ、この人から離れたくない、そう思っていた。

予選の日は、朝からよく晴れていた。  
春の風が気持ち良い。

桃は一人で会場へ向かった。

受付でヒカルが取ってくれたチケットを渡し、席に着いた。

「わぁ、満席...」

このコンテストの注目度がわかるようだった。

「ヒカル順番は...最後の方か。」

渡されたパンフレットを見ながら桃が独り言を言った。

ステージが始まる。

桃が全く知らない芸人から、テレビでよく見る顔まで、色々だった。

お客さんの反応も素直なもので、面白い時には大いに沸き、またその反対もしばしばあった。

(次がミドコロの番だ...。)

桃が緊張してしまう。

ヒカルとケンが勢いよくステージに飛び出してきた。

会場が悲鳴にも似た声援でいっぱいになった。

(やっぱり人気者なのね...。)

桃は他人事のように思った。

二人が何か言うたび、会場が爆笑した。  
人気だけじゃない、実力もあるんだ、と桃は感じた。

(ネタをちゃんと見た事が無かったな...。)

ミドコロは当然のように予選を突破した。

その後、準々決勝、準決勝と勝ち進み、決勝進出が決まった。

ヒカルは勢いに乗っていた。

「ここまできたら、やっぱり優勝しかないな。」

そんな強気の発言もしていた。

「頑張っ！」

桃も何もかもがうまく行く気がしていた。

でも、そんな時に限って、水を差すような事が起こってしまった。

二人の事が、また週刊誌に載ったのだ。

記事には、桃がヒカルの応援に会場に駆けつけている事、マンションにも出入りしている事などが書かれ、おまけに今回は、父の事も書かれてしまった。

「有名バイオリニスト、M氏の長女' '本人もこの春から大学生活の傍ら、某音楽スタジオでピアニストとして活躍' ...これじゃ、わかる人にはわかってしまうな...。」

「私はいいの。でもヒカル、とても大事な時期だったのに...。やっぱり応援なんか行くべきじゃなかったね。」

「いや、いいんだ。それに今回は...、認めようと思ってる。桃ちゃんさえよければ...。」

「え？」

「どうだろう？」

「私は...かまわないけど。」

「そっか。」

ヒカルが桃を抱きしめながら言った。

「絶対守るから。安心して。」

きっと、大丈夫。

桃はまた安心感に包まれていた。



案の定、今度は自宅にも記者が来た。

母は、

「お話しする事はありません。お帰り下さい。」

の一点張りで、通してくれた。

「お母さん、ごめん...。」

「お母さんは大丈夫よ。むかーしこういう目に合ってるわ。」

そう言って笑った。

ミドコロのDVDが発売されるという事で、記者会見が行われたが、質問は桃の事に集中した。

『記事によると、お相手は有名音大に通う女子大生と言う事ですが！？』

『ご両親も公認だとか！？』

『やはり、彼女の応援は、決勝進出に大きく影響しましたか！？』

ヒカルは次々と質問攻めにあっていた。

司会が「今回のDVD発売に関係ないご質問はお控えください」というのを制し、ヒカルが話し始めた。

「記事に書かれている女性とお付き合いしています。大切な人です。」

それだけ言って、ヒカルは会場を去った。

記者がヒカルの背中に向かって叫ぶように質問しているのが映っている。

桃はドキドキしながらテレビを見ていた。

ヒカルが認めた。

桃を大切な人だと、言った。

「なかなかやるわね。」

いつの間にか後ろに立っていた母が、テレビに向かってそう言った。

「桃、これから少し大変かもしれないけど、あなたもしっかりしなさいよ。」

「うん、わかってる。」

桃はそう言って、学校へ向かった。

なんとなく視線を感じる。

それが気のせいではない事が、お昼休みにわかった。

桃が全く知らない学生から、

「あなた、ミドコロのヒカルと付き合ってるの？」

と聞かれた。

桃が答えないでいると、その学生はどこかへ行ってしまったが、桃にも聞こえるような声で

「別にたいして可愛くないじゃんね。」

と言ってるのが聞こえた。

ヒカルファンなのかもしれない。

その後も度々そういう事があり、桃は少し落ち込んでいた。

(小夏がいてくれたらな...。)

そんな事も考えていた。

その日は久しぶりの仕事が入っていた。  
音楽スタジオに着くと、SHUがそこにいた。

「桃ちゃん。久しぶり。なんだか大変な事になってるね？」

「はい...。学校でも色々言われて...。」

「それで落ち込んでるのか？」

「少しだけ。」

「そんな事じゃダメだよ。桃ちゃんはこれからピアニストとしてももっと可能性を広げていくチャンスがあるんだ。ここで負けちゃダメだ。強くなないと。」

SHUが叱るように言った。

「そうですよね。うん、こんな気持ちのまま演奏もできないし。」

「そうそう、その調子。じゃあ、頑張ってるね。」

そう言って、SHUはスタジオを出て行った。

桃は、スタジオの帰り、近所の神社に寄った。

「えーと、こういう時はどれなんだろう？」

お守りの前で、あれこれ悩む。

「これかな、これ一つ、お願いします。」

桃は小さなお守りを手に取り、大切に鞆にしまった。

ヒカルの決勝の前日、桃はヒカルに会いに行った。  
記者がいるかもしれないと思ったが、どうしても渡したい物があった。

「ヒカル、お守りを買ったの。どうしても渡したくて...。」

「ほんと？嬉しいよ、ありがとう。」

そう言ってお守りを受け取ったヒカルがそれを見て爆笑した。

「え？」

「桃ちゃん、これ...'学業成就'って（笑）」

「あれ？違った？」

「おーい、天然かよ。」

ヒカルはまだ笑っている。

「そうだな、こういう場合は'商売繁盛'かな？それも違うか。」

「ごめん、間違えた...。」

「ううん、謝らないで。嬉しいよ。これで緊張が解けた気がする。桃ちゃんのお陰だね。」

「ほんと？」

「ほんと、ほんと。ありがとう。」

「じゃあ、今日は帰るね。明日頑張っ！テレビで見てるから。」

「うん、おやすみ。気を付けて帰るんだよ。」

「おやすみなさい。」

桃はその夜、夢を見た。

ヒカルが笑って手招きしている。

桃は嬉しくて、ヒカルの方へ駆け寄って行った。

ヒカルが手を伸ばす。

しっかりと桃の手を握りしめて、手の甲にキスをした。

桃は窓から差し込む朝日で目を覚ました。

「あの夢...」

いつもは、違う女性の手を取ってヒカルがどこかへ行ってしまう悲しい夢。

今回は違った。

ヒカルは桃の手を取ってくれた。

そして、キスをしてくれた。

「今日はきっと大丈夫...」

桃はそう言い、リビングへ下りた。

その日、桃は1日中自宅でピアノを弾いていた。

ショパンの「ポロネーズ1番」、リストの「小人の踊り」、シューマンの「花の曲」。

ヒカルが頑張っていると思うと、桃も自分の出来る事に打ち込みたいという気持ちになっていたのだ。

ヒカルの決勝の時間になり、桃は母と弟の樹とテレビの前に座った。

「いよいよね。」

母が言う。

「うん...。」

決勝は、6組で行われ、会場のお客さんの採点と、審査員の得点の合計で優勝者が決まる事になっていた。

ミドコロはくじ引きで、出番は最後だった。

さすが、決勝とあって、どの組も笑いをとっていた。

いよいよ、ミドコロの出番になった。

桃は祈るような思いで画面を見つめた。



桃は、楽しんで見ようと思っていたが、実際始まると、そうは言っていられなかった。

ヒカルとケンは、盛り上がっている会場を更に熱くさせている感じがした。

でもそれが、前の組より面白かったのか、桃は自分が緊張しすぎてわからなくなっていた。

ミドコロのステージが終わり、審査に入った。

桃は心臓が飛び出しそうなほどに緊張した。

テレビのヒカルは、意外にもリラックスした表情をしている。

(お願い...お願い...)

桃は何度も心の中でそう呟いた。

会場の集計が終わり、審査員の得点も出たようだ。

司会が「それでは、発表します。」

と言い、第6位から得点とコンビ名を読み上げていく。

6位、5位、4位、3位と順に読み上げ、呼ばれたタレントが喜んだり、落ち込んだりしている。

ミドコロはまだ呼ばれていない。

「それでは、1位と2位を同時に発表しましょう。」

電光掲示板に全員が注目した。

桃はまばたきも忘れて、テレビを食い入るようにして見た。

電光掲示板に結果が映し出され、会場が一気に沸いた。

「桃！！！」

母が大きな声でそう言った。

「姉ちゃん！！！」

樹も同時に叫ぶ。

桃は声が出なかった。  
その代わりに、涙が溢れた。

(ヒカル...ヒカル...)

ミドコロは優勝した。

ヒカルとケンが抱き合って喜んでいる。

司会がヒカルに感想を聞いている。  
ヒカルは目に涙をためてそれに答えていた。

番組が終わっても、桃はしばらくテレビの前から動けないでいた。

コンテストで優勝してからのミドコロは更に忙しくなった。  
それでも、桃は寂しくなかった。

ヒカルがテレビで桃との事を認めて以来、二人の絆は深まった気がしていた。

それに、桃がピアノを務めた歌手のCDが発売になり、それも評価が良かった。

「お父さんにもCDを送ろうかな？」

桃が母に言うと

「そうね、お父さん喜ぶわよ。」

と言った。

「ねえ、お母さん。」

「なに？」

「お父さんと...ちよくちよく会ってたの？」

桃は気になっていた事を母に聞いてみた。

「そうね、黙っていてごめんね。去年末にお父さんが公演で日本に帰って来てから、何回か話をしたわ。」

「そうなんだ。」

「ほとんどが、あなた達の話よ。」

「え？ そうなの？」

「お父さんも娘が心配なのよ。」

桃は不思議な気持ちだった。  
父と母が喧嘩ばかりしていた日々。  
正直、それまであまり印象の良くなかった父。

でも、もうそんな事はどうでも良かった。

父と母がよりを戻してくれた事が本当に嬉しかったからだ。

「お父さん、早く帰ってくるといいね。」

桃は母に向かってそう言った。

「そうね。」

とだけ母は言って、買い物にでかけた。

CDが発売されてから、桃は忙しかった。  
歌番組の収録や、雑誌の取材も受けたりした。

幸い、ヒカルとの事は大げさに騒がれなくなり、充実した日々を送っていた。

そんなある日、父から電話がかかってきた。

「桃か？元気にしているのか？」

「うん、お父さんは？」

「こっちでの公演に忙しくしているよ。それから、CDをありがとう。」

「あ、もう届いたんだ。聞いてくれた？」

「ああ、聞いたよ。桃、素敵なピアノを弾くようになったんだね。」

「お父さん...」

父に褒められ、桃はくすぐったいような気持になった。

「毎日聞いているよ。今後も期待してるからな。今日は樹は？」

「レッスンに出かけてるよ。樹も今年高校受験だし、お父さんみたいなバイオリニストになるんだって燃えてる。」

「そうか、自分の力を信じて頑張れって伝えておいてくれ。」

「うん、わかった。お母さんは今、買い物に行っちゃっていないけど？」

「そうか、また電話するよ。じゃあ。」

そう言って、電話が切れた。

今年の年末、父が日本に帰ってくる。

今までのように、少しの滞在じゃなく、日本を拠点に活動する事になっているらしい。

桃はとにかく、それが楽しみだった。

テレビや雑誌の仕事が増えたが、桃は今まで以上に学校の授業やレッスンにも熱心だった。

父の名に恥じない娘でありたかったし、本業は学生だと思っていたからだ。

かといって、仕事の手抜きもしない。

桃は、これまで以上に色々な事に熱心に取り組んでいた。

ある日、桃は母に結婚式の写真を見せてもらっていた。

今まで見た事のなかった、母の花嫁姿。  
父の若い頃の写真。

「お母さん、きれーい、それにお父さん若い！」

「あー、この頃の体型に戻りたいわ（笑）」

母が笑う。

その時、自宅の電話が鳴った。

母が写真を手に持ったまま、電話に出る。

「もしもし、朝田です。」

そう言ったきり、母は何も言わなかった。

母の手から写真が床に落ちた。

「...お母さん？」

その時、母の膝ががっくりと床に落ちた。

「お母さん、どうしたの!？」

桃が母に駆け寄ると、母は受話器を取ったまま泣いていた。



「ねえ、お母さん？」

母は「わかりました。」と言って、電話を切った。

「なんなの？お母さん、ねえ。」

母が静かに口を開いた。

「お父さんが...」

「お父さん？」

「今朝、亡くなったわ。」

「え！？」

母はそのまま泣き崩れてしまった。

「お母さん！どうして！？なんでなの！？どういう事！？」

母はしばらく泣いて、桃に話し始めた。

「桃、良く聞いて。お父さんは...、ずっと病気だったの。今の医療技術では治せない病気と言われたわ。」

「うそ...」

「海外でも治療を受けて...。少しは良くなっていた。お父さんは、体が動くうちにどうしても日本での公演をしたいと言った。それで、去年末から帰ってきてたのよ。」

「だって、今年の年末にはこっちに帰ってくるって、一緒に住むって言ってた！」

桃は、信じられないという思いでいっぱいだった。

「そうね、日本に帰って来て、また治療を再開する予定だったの。でも、お父さんの体は思ったよりも...悪かったみたい...。」

桃は涙が溢れた。

昨年、父の演奏会を聞いた後、楽屋で抱きしめてくれた。  
ヒカルとの事を心配して、話を聞いてくれた。  
ヒカルには「娘をよろしく」と言ってくれた。  
そして、桃に「幸せになれ」と…。

先日かかってきた父からの電話。  
今思えば、父は死期を予感していたのかもしれない。

まだ父の声が耳に残っている。もっと色々話せば良かった。

桃は後悔してもしきれなかった。

「桃、お母さんは向こうに行ってお父さんを連れて帰ってくるから、2～3日留守にするけど…。  
樹をお願いね。」

桃はまだ信じられなかった。  
でも、「うん」と言うしかなかった。

自分の部屋に行き、本棚から父のパンフレットを取り出した。  
パンフレットに桃の涙が落ちる。

「お父さん…。」

桃は涙を拭いて、携帯を取り出した。  
ヒカルに電話する。

『もしもし？』

「もしもし…私。」

『桃ちゃん、どうしたの？泣いてる？』

桃は涙をこらえて、父の死をヒカルに伝えた。

ヒカルはしばらくの沈黙の後、「今から行く」と言って、電話を切った。

1時間ほどして、ヒカルが自宅にやってきた。

「桃ちゃん...」

ヒカルは桃を抱きしめた。

桃はヒカルの胸の中でしばらく泣いた。

ヒカルはいつまでも黙って桃を抱きしめてくれていた。

父の死は、テレビでも報道され、色々な人の協力で、立派な葬儀が行われた。

ヒカルは、「余計な報道がでると迷惑をかけるから」と、葬儀には参列しなかったが、その後自宅に線香をあげにきた。

「ヒカルさん、わざわざありがとう。」

母がヒカルに言った。

「いえ、お葬式に行けずにすみませんでした。...あの、桃さんは？」

「お葬式が終わってから...ずっと部屋にこもってるのよ...」

「お部屋に行ってもいいですか？」

「構わないけど...。私が何を言っても反応がなくて...。」

ヒカルが桃の部屋をノックした。

「桃ちゃん？入るよ？」

桃はベッドに腰かけ、生氣のない目が一点を見つめていた。

「桃ちゃん...。」

「...。」

「桃ちゃんがそんなんじゃ、お父さんが心配するよ。」

ヒカルがそう言うと、桃がヒカルの方を向いた。

「ヒカル...。」

「辛いけど...前向きに頑張ろうよ、俺に出来る事はなんでも協力するし、お父さんもそれを望んでいると思う。」

「私...弾けないの。」

「え？」

桃が自分の手を見つめながら話した。

「動かないの、手が。鉛筆や、携帯は持てるのに、ピアノの前に座ると、手が石のように固まってしまうの...」

そう言って、桃は泣き出してしまった。

「きっと、もう一生弾けないのよ！」

最後は叫ぶようにして、桃が言った。

ヒカルは何と言っていいかわからず、ただ桃を抱きしめていた。

それから何日も、桃はろくに食わず、ただ自分の部屋にいた。

見かねた母が病院へ連れて行った。

「恐らく、お父様の死によって、大きなショックを受けた影響だと思います。カウンセリングを受けながら、ゆっくりと治していくしかないでしょう。」

そう言われた。



学校と仕事はしばらく休む事にした。  
ピアノが弾けないので、どちらも、どうしようもなかった。

「ゆっくりやってみましょう、桃。お母さんに出来る事、なんでも言って。」

母はそう言ってくれた。

父の死が、桃の中で少しずつ整理されても、ピアノが弾けるようにはならなかった。

本当にこのまま一生ピアノが弾けないんじゃないかと思うと、涙をこらえられなかった。

ヒカルやSHUも心配して、仕事の合間に会いに来てくれたが、桃の状態が変わる事はなかった。

そのまま1ヶ月が過ぎた。

桃はすっかり自信を失っていた。

今まで音楽中心の生活をしてきた。  
ピアノのない人生は考えられない。

見知らぬマンションの屋上に上がり、このまま飛び降りてしまおうかと思った事もあった。  
それ程思いつめていた。

でもそんな勇気もなかった。

自分が情けなくて、とてもみじめに感じた。

「お母さん...。」

「なに？」

「私...、学校辞めようかな？」

「桃！何を言っているの！大丈夫、きっと治るわ。学校だって、休学にできるじゃない。諦めないで、一緒に治しましょう。」

「でも...。」

桃はピアノの前に座る事すら辛くなっていた。

その時、桃の携帯が鳴った。

『もしもし？』

「ヒカル。」

『俺、来週1週間休みを取ったよ。ちょっと無理やりだけど。今、お母さんいるかな？』

「え？お母さん？いるけど。」

『うん、ちょっと代わって。』

桃は母に携帯を渡した。

母の言葉からは、ヒカルが何を話しているのかわからなかった。

もう一度、母から携帯を戻された。

『桃ちゃん？お母さんの了解をもらったよ。明日からウィーンに行こう。』

「え！？ウィーン？」

桃は意味がわからなかった。

「どういうこと？」

『せっかく取れた休みを、桃ちゃんの好きな音楽の街で過ごしたいんだよ。それに、小夏ちゃんにも会える。』

「...ヒカル...。」

『じゃあ、急だけど。準備しておいてね。』

そう言うと、ヒカルは電話を切ってしまった。  
桃は、母を見た。

「お母さん...。」

「向こうでゆっくりしてらっしゃい。小夏ちゃんにもよろしくね。それから...。」

「うん？」

「お父さんが公演の時に使っていた部屋が向こうにあるわ。今月末で契約が切れるから、その前に片付けに行くつもりだったけど...。今回はそこを使いなさい。まだ生活できるようになっているはずよ。」

そう言うと、母が住所を書いてくれた。

一緒に行くと目立つので、ヒカルとは空港で直接待ち合わせる事にしていた。

桃が待ち合わせ場所に立っていると、後ろから声をかけられた。

「おはよう。」

帽子をかぶり、眼鏡をかけたヒカルが立っていた。

「おはよう...。」

「眠れなかったのか？」

「うん...。」

「まあ、フライトが長いからね。飛行機で寝たらいいよ。」

ウィーンまでは直行便で約12時間。

日本を昼前に出ると、ウィーンには現地時間で同日の夕方頃到着する。

飛行機は定刻に離陸した。

ヒカルが少し良い席を取ってくれたので、桃は眠る事ができた。

「桃ちゃん、桃ちゃん。」

ヒカルの声で目を覚ました。

「もうすぐ着陸だよ。」

ヒカルに言われて、シートを戻した。

飛行機が空港に着陸した。

空港に降り立つと、日本より少し肌寒い感じがした。

「桃ー！桃ー！！！」

振り向くと、そこに小夏がいた。

「小夏！」

「桃！それにヒカルさん、遠くて疲れたでしょう？」

「ううん、小夏、会えて嬉しい。」

「桃、私もよ。それに...、お父さんの事...おばさんに聞いた。桃、大丈夫？」

「うん...、ありがとう。」

とだけ、桃は言った。

三人はタクシーで桃の父が使っていた部屋に行く事にした。

運転手に住所を見せ、車が走り出した。

桃には、ウィーンの街全体が、美術品のように見えた。

数十分して、タクシーがマンションの前で停まる。

「ここかな...。」

料金を払い、マンションの中へ入った。

母から連絡を受けていた管理人が待っていてくれた。

小夏がドイツ語で何か話している。



「お父さんの事、本当に残念でした。とても素晴らしい演奏家だったのに。どうぞこの鍵で入って下さい。帰るに日また鍵を受け取りに来ますから。'って。」

桃は管理人に礼を言って、中へ入った。

シンプルな部屋だったが、リビングの中央にはピアノが置かれていた。

「ここは、音楽をする人だけが住んでるんだって。だから、好きなだけ演奏していいみたいよ。」

小夏が言った。

「そうなんだ...。」

桃はピアノを見つめて言った。

「明日の公開レッスンは13時からだからね。場所はここに書いておいたよ。」

ウィーンでは、コンサートを聴いたり、小夏の通うオルヒデーエ音大の公開レッスンを聴く予定にしていた。

その日三人は早めの夕食を食べ、小夏は自分のアパートに帰って行った。

父の部屋に戻り、改めて見回してみる。

最近まで見ていたであろう、楽譜や書類が置かれていたり、父が着ていた服がハンガーにかかっていた。

その中に桃が送ったCDがあった。

ケースの裏には、日付と'愛する娘、桃より'と書かれていた。

桃はそれを見て涙をこらえられなくなった。

「桃ちゃん...。」

ヒカルがそばにきた。

「お父さんは、桃ちゃんの事を本当に愛していたんだね。」

「うん...。」

その日、二人は早めに休むことにした。

「桃ちゃんは寝室のベッドで休んでね。俺はここで。」

そう言って、ヒカルはリビングのソファに毛布を持ってきた。

「でも...。」

「いいから、いいから。今日は疲れたし、早く寝ないとね。」

「うん、お休み。」

そう言って、桃は寢室へ行った。

ヒカルが笑って手招きしている。

桃は嬉しくて、ヒカルの方へ駆け寄って行った。

ヒカルが手を伸ばす。

桃は懸命に手を伸ばすが、どうしてもヒカルの手を取る事が出来ない。  
指が動かない...

「！」

桃は汗だくで起きた。

呼吸が乱れている。

桃はしばらくしてリビングへ行った。

「ヒカル...」

「...ん？桃ちゃんどうした？」

ヒカルが目をごすりながら起き上がった。

「起こしてごめん...。」

「ううん、どうした？眠れないのか？」

「一緒にいて...。」

「桃ちゃん...こっちにおいで。」

ヒカルは、桃を自分のそばに呼んだ。

また、ひとつの毛布にくるまって、桃は目を閉じた。

ヒカルが背中をポンポンと優しくたたいてくれる。

桃を優しい空気が包んだ。

いつの間にか、桃はまた眠りについていた。

翌日、桃とヒカルは、小夏の通う学校へ向かった。

「わー、すごい。」

ウィーンは街全体が美術館みたいだと、昨日思ったが、オルヒデーエ音楽大学は、まさにその中の最高作品と言えるもので、とても美しい建物だった。

「これはすごいな。ここで未来の大音楽家が学んでるのか。」

ヒカルも感心したように言った。

二人は公開レッスンの行われるホールへ向かった。

そこはレッスンと言うより、これからコンサートでも行われるかのような観客の数で、テレビカメラも来ていた。

ドイツ語と英語のアナウンスが流れる。

桃は、その中に「KONATSU SAKURA」という名前を聞いた気がした。

「小夏ちゃんがレッスンを受けるのか？」

ヒカルも何となくアナウンスの意味がわかったらしく、そう桃に聞いてきた。

「わからない...。」

会場が静まり、舞台に置かれたピアノに向かって小夏が歩いてきた。

(やっぱり！)

桃は心の中でそう思った。

小夏がピアノの前に座ると、講師が出てきて、レッスンが始まった。

シューマンの幻想曲Op.17。

入学してまだ数ヶ月のはずなのに、小夏のピアノは更に素晴らしいものになっていた。こんな演奏に注意する所があるのだろうか、と桃は思ったが、小夏の演奏は、度々止められ、講師が何か指示をし、また弾かせる、というのを繰り返した。

桃は夢中になって聞いていた。

ドイツ語はよくわからなかったが、小夏の演奏が最初より一段とよくなったのがわかった。

「すごい...」

これが世界のトップなんだ、桃はそう感じずにはいられなかった。

公開レッスンが終わり、小夏が二人の所に来た。

「小夏！私本当に感動した。ここは素晴らしい所だね。」

「ありがとう。私もここに来られて、本当に良かったって思ってる。毎日が新しい事の発見だし、演奏する事が楽しくて、楽しくて。」

小夏の無邪気な笑顔に、桃の心が少し痛くなった。

(どうして私は弾けないの...)

それから、ヒカルと桃は少しドレスアップしてコンサートを聴きに行ったり、観光したりしてウィーンを楽しんだ。

桃の心もだいぶ落ち着いてきていたが、やはりまだピアノは弾けなかった。

いよいよ日本に帰国するという前日、桃は父の本棚から古くて厚い日記帳を見つけた。

「お父さんの日記？」

桃は少しためらったが、中を開いてみた。  
数行ずつ、何年も書き記せるタイプのものだ。  
少し褪せたページをめくる。

- ー 今日、娘が生まれた。難産だった。  
妻には本当に感謝している。  
「ありがとう、お疲れ様」そう声をかけた。  
私が娘の手のひらに指をあてると、  
娘の小さな手が私の指を握った。  
なぜか、涙が出た。

桃は、急いで次のページをめくった。

- ー 娘に「桃」と名付けた。  
いつか妻と見た美しい桃の花からとった名前。  
あんな風に皆から愛され、  
いつまでも幸せである事を願う。

その後も初めて立った事、歩いた事、保育園に通い始めた事などが書かれていた。



- 娘がピアノを習い始めた。  
新しい楽譜をもらい、とても嬉しそう。  
今のところ、嫌がることなく通っている。

桃が4歳の頃の日記だった。

でも、その日記も桃が小学校6年生の頃には、あまり書かれなくなり、ついには白紙になっていた。  
ちょうど父と母が離婚した頃だ。

数ページ白紙があり、また日記が再開されていた。

- 桃が中学校に入学。  
藤乃が写真を送ってくれた。  
大きくなった娘。会いたい。

この頃になると、桃の母の呼び方が、「妻」から母の名前「藤乃」に変わっていた。

更にまた、白紙になったので所々書かれている部分を読んだ。

- 桃が高校受験に合格し、中学を卒業した。  
専攻はピアノ。自分の可能性を信じて、  
がんばってほしい。  
それと、今日は病院へ行った。結果が思わしくない。

(この頃から父は具合が悪かったのか...)

- 日本公演に向けて、色々準備をしている。  
桃と樹に会えるだろうか？
- 藤乃から、桃に恋人ができたらしいと聞く。  
複雑な心境。

「あ...お母さんったら...」

- 桃が滞在中のホテルに訪ねてきた。  
彼の事で悩んでいる。  
信じる事、それだけ。

- ー 今日は体調が悪い。  
一日のほとんどを寝て過ごす。

桃は父がこんなに体調が悪かったとは全然気がつかなかった。

- ー 藤乃と話し合い、もう一度四人でやり直したいと告げた。  
何度か話すうち、藤乃は賛成してくれた。  
桃や樹が受け入れてくれるといいのだが...
- ー 桃と樹が、私とまた生活する事に賛成してくれた。  
こんなに嬉しい事はない。最高の日だった。  
桃の彼氏にも会った。桃を任せられる、そう感じた。  
それと桃、お誕生日おめでとう。

「お父さん...。」

- ー 日本公演を終え、一旦ウィーンへ戻る。  
年末には日本へ帰国し、  
家族との生活が始まる。

それから、またしばらく白紙になった。

- ー 入院して、何日経っただろうか。  
ずっと体調がよくない。  
私はもしかしたら...このまま...

そこまで書かれ、その日はボールペンでぐちゃぐちゃに書きなぐられていた。

そして、最後のページにはメッセージが書かれていた。

藤乃へ

結婚してからずっと君には迷惑をかけた。  
寂しい思いもさせてきたね。  
子どもたちの事も任せきりで、私は好きな事をやってきた。  
あの頃は、それが当然と思い、君の気持ちの変化に気付いてやれなかった。  
今になって、また私のわがまを聞いてくれた君。  
四人で暮らす事を本当に楽しみにしている。  
しかし、私の残された時間が許してくれるだろうか。  
「愛してる」もう一度会って、君にそう伝えたい。

桃、樹へ

君たちは、お母さんの言う事をよく聞いて、  
本当に良い子に育ててくれた。  
ありがとう。  
君たちが好きな音楽と生活を共にしながら、  
将来幸せに過ごしている事を願う。  
でもお父さんはそれを見られないかもしれない。  
残念だよ。  
夢を見なければ夢は叶わない。  
そして、努力あってこそ、その夢は現実となる。  
自分自身をあきらめない事。  
その事だけは忘れないで。  
愛してる。

「お父さん...。」

桃は日記帳を抱きしめて泣き崩れた。

帰りの飛行機でも桃は日記帳をしっかりと抱きしめていた。

「桃ちゃん、ウィーンに行って良かったね...。」

ヒカルが桃に声をかけた。

「うん...。」

桃は日記帳を見つめて答えた。

- 夢を見なければ夢は叶わない。  
そして、努力あってこそ、その夢は現実となる。  
自分自身をあきらめない事。

桃はその部分を何度も読み直した。

「自分をあきらめない...」

この言葉が桃の心に響いた。

自宅に戻り、母に父の日記帳を渡した。

「これをお父さんが書いてたの？」

母は知らなかったようだ。

母もまた、最後まで読み終わると、泣いていた。

「お母さん私...弾いてみる。」

桃は自宅のピアノに向かった。

椅子に腰掛け、指を鍵盤の上に置く。

指が震える。

「自分自身をあきらめない...」

桃はそう呟いて、指を動かした。

久しぶりに聴く、自分の音。

「桃！弾けたじゃない！！」

母が桃に抱きついた。

「お母さん！！私、私...弾けた！」

「お父さんのお陰ね...。」

「お父さん...ありがとう。」

桃は、復学し、仕事も再開した。

「桃ちゃん！戻ってきてくれたんだ！！」

「SHUさん...色々にご迷惑をおかけしてすみませんでした。」

桃は、とっくに首になっているだろうと覚悟していたが、SHUとプロデューサーの福田の働きかけで、なんとか在籍させてもらえていたようだった。

「今までの分も取り返してもらうからね。」

「はい！」

桃は、それから意欲的に仕事に取り組んだ。  
有名アーティストのコンサートに同行したり、新曲のピアノを担当したり、順調だった。

ただ、桃はウィーンから帰国して以来考えている事があった。

それをSHUに言い出せずにいた。

ある日、学校の門を出ると、そこに一人の女性が桃を待っていた。

「あすかさん...？」

「桃さんね？ちょっといいかしら。」

「...はい。」

サングラスをかけたあすかの表情は見てとれなかった。

あすかに案内され、喫茶店に入った。

「突然、ごめんなさい。」

あすかはまず桃にそう詫びた。

「いえ、でも驚きました。どうなさったんですか？」

「あなたに...一度会いたかったの。ヒカルが選んだ人がどんな女性なのかって...。なんだか未練がましくて、自分がいやになっちゃうけど。」

あすかはそう言って笑った。

「あすかさん...。ヒカル...さんは、私に色々な事を教えてくれました。信じる事、あきらめない事、そして愛する事。」

あすかは黙って聞いている。

「そんな所が、再会した私の父に似ているな、って思ったんです。」

「お父様...亡くなられたのよね。」



「はい、私はそれで、一時期ピアノが弾けなくなりました。」

「ヒカルさんは、そんな私をずっと見守ってくれました。そして、心が戻るまで待っていてくれた。」

桃は更に続けた。

「私は自分を取り戻す事ができたんです。これは、父と...ヒカルさんのお陰だと思っています。」

「そう。」

「私は...ヒカルさんを愛しています。」

桃がそう言うと、あすかが静かに話した。

「あなたは、強い女性ね。ヒカルが惹かれるのもわかる気がするわ。そして、私じゃダメだった理由もね。」

「あすかさん...。」

「今日をごめんなさい。もう二度とこんな事しないわ。さようなら。」

そう言って、あすかは店を出て行った。

桃は、自分があすかに向かって話した事で、自分の気持ちを確認できた気がした。

ヒカルは桃の心が戻るのを待っていてくれた。  
励ましてくれた。

父と同じように、信じる事、あきらめない事を教えてくれた...

次の仕事の日、桃はSHUに時間を作ってもらった。

「どうしたの？何か話でも？」

「SHUさん私...。」

「うん？」

「ここを辞めさせてもらいたいんです！」

「え？どういう事？」

「お願いします！」

「またなにか...悩み？」

「違うんです。私、このままここにいちゃいけないんです。」

「どうして？桃ちゃんなら、きっと素晴らしいアーティストになれるよ？」

「私...、自分のやりたい事がわかったんです。」

SHUや福田によくしてもらい、なかなか言い出せずにいた事を思い切って言った。

「なに？」

「私、母みたいな教師になりたい。」

「教師？」

「はい...。」

「これは驚いた。せっかくプロの道が開けたここを辞めて、教師になりたいって事？」

「はい...。」

桃は少し間をおいて話し始めた。

「私、音楽をやってきて色々な事を学びました。技術だけじゃなくて、人を想う事、愛する事...。私の周りの人たちが、それを教えてくれました。うまく言えないけど、私も自分の言葉で伝えていきたいんです。一流ピアニストになれるだろう、と言われてきた母が教師になった理由が今は少しだけわかる気がするんです。」

SHUは黙って聞いている。

「SHUさんや福田さんには、本当に感謝しています。それに...申し訳なく思っています...。」

桃は下を向いた。

「桃ちゃん...。」

「はい。」

「わかったよ。桃ちゃんの気持ちはわかった。」

「SHUさん...。」

「ただし、条件があるよ。」

「条件？」

「俺の、次の新曲でピアノを弾いてくれ。それで...、桃ちゃんの卒業だ。」

「SHUさん！」

「いいね？」

「ありがとうございます！」

「なんだか...。」

「はい？」

「2回フラれた気分だよ。」

そう言って、SHUは笑った。

学業と、レコーディングの両立は大変だった。  
しかし、桃は自分の全てをその曲にぶつけた。

完成した曲は、桃にとって、生涯忘れられない1曲となった。

「桃ちゃん、ありがとう。そして、お疲れ様！」

SHUがそう言うと、スタッフが花束を桃に渡したり、「お疲れ様」と声をかけてくれたりした。

桃はまた泣いていた。

「泣き虫だな、桃ちゃんは。」

SHUがそう言って、桃の頭をポンポンと撫でた。

「夢に向かってがんばって。それから...」

SHUは言葉を続けた。

「俺は...もうすぐアメリカに行く。」

「え？」

「ずっと前から決めてたんだ。本当は桃ちゃんと...」

「SHUさん？」

「いや、いい。なんでもない。」

「...？」

「ヒカルと、必ず幸せになるんだよ。」

「SHUさん...。」

桃は本当に良い人たちに囲まれて、幸せだと感じていた。

スタジオを出ると、ヒカルが迎えに来てくれていた。  
今日は外に出る時にはいつもかけている眼鏡をしていない。

「ヒカル...。」

「お疲れ様。頑張ったね。俺はもう、隠れない。」

ヒカルが桃の手をとって、走り出した。



ヒカルに気付いた通行人が、携帯をこちらに向けたり、歓声を上げたりしている。

「ヒ、ヒカル！」

「いいから、いいから。」

ヒカルは一切気にしない様子で走り続けた。

「ど、どこ行くの!？」

「どこまでも!一緒ならどこだっていいんだ!」

そう言って、二人は街を走り続けた。

4年後一

桃は栄星音大附属中学校の教壇に立っていた。

「おはようございます。新任の朝田桃です。今日から皆さんと一緒に色々な事を学んでいきたい  
と思います。よろしくお願いします。」

つい最近までランドセルを背負っていた小さな音楽家たちが、瞳をキラキラさせて桃を見ている  
。

ここにいる全員が、夢を見、希望を持って、この先色々な事を学んでいく。

桃は心からその手伝いがしたかった。  
少しでも、夢に近付けるように。

弟の樹は、高校のバイオリン科を卒業し、なんと今年からオルヒデーエ音大に進学した。

「父のようなバイオリニストになりたい」

という夢を現実に近付けていっている。

樹が成長するにつれ、母は

「樹、お父さんに似てきたわ。」

そう言って目を細めていた。

SHUは、渡米し、デビューを果たした。

小夏は、オルヒデーエを卒業した後も、様々なコンクールで入賞、プロのピアニストになっていた。

皆がそれぞれの道を歩いている。  
夢や希望を捨てず、ただひたすらに。

「桃！おまたせ。」

「ヒカル、遅い遅い、始まっちゃうよ。」

桃とヒカルは、小夏のコンサートに来ていた。

「小夏ちゃんの日本初公演か。」

「そうよ、これだけは見ないわけにはいかないもの！」

小夏のコンサートが始まった。  
観客が、呼吸も忘れたかのように、小夏に見入った。  
技術だけじゃない、小夏の演奏は、人の心に訴える何かを持っている。

桃も、そんな演奏に惹かれた一人だった。

素晴らしい演奏が終わり、小夏がマイクを取った。

「めずらしいね、ピアニストが演奏後に何か話すのかな？」

ヒカルがそう言った。

「今日は、私の日本初公演にお越し下さいます、本当にありがとうございます。実は今日、会場に私の大切な親友が来てくれています。」

「小夏...」

桃は驚いた。ヒカルも驚いて桃と小夏を交互に見ている。

「私は...その彼女と色々学んできました。辛い事や苦しい事もありました。でもここまで来れたのは彼女の力が大きいと思っています。彼女に色々と教わりました。彼女が頑張っている姿を見て、私も頑張ろうと思いました。感謝の気持ちをいつまでも忘れたくない、そう思い、彼女の誕生日である今日、こうして演奏会を開かせて頂きました。」

会場中が拍手に包まれる。

「今日お越しの皆様も、大切な人がいらっしゃると思います。どうぞ、その方と過ごしてきた日々を今一度、思い出してみてください。そして、いつもは言えない感謝の気持ちを言葉に出してみてください。そうすればきっと、皆様にも新しい幸せが降り注ぐと思います。」

小夏が桃の席を見つめて最後にこう言った。

「お誕生日、おめでとう。...本日は、本当にありがとうございました。」

会場の拍手が更に大きくなり、小夏の日本初公演は、感動に包まれて終わった。

桃はあえて、楽屋を訪ねずに会場を出た。

桃も小夏も、何も言わなくても気持ちがわかっていた。

中学からずっと一緒だった。

優等生の小夏と、中の上くらいの桃。

でもそんな二人の息がぴったりと合い、自然と仲良くなった。

小夏に刺激されて、桃の演奏も変わってきた。

先生にレッスンを受けるより、小夏と一緒に弾いている方が、上達する気がしていた。

二人の友情は、高校生になっても、進む道が違ってても、変わらなかった。

「小夏ちゃんにはやられたなあ。あんな演出、ずるいよ。」

「うん、嬉しかった。」

「色々俺も考えたんだけどね。まあ、普通がいいのかなって。小夏ちゃんの後じゃさ。」

「え？」

ヒカルが小さな箱をポケットから取り出した。

「お誕生日おめでとう。それから...」

ヒカルが桃を見つめて言った。

「結婚しよう。」

小さな箱には、きらきら光る指輪が入っていた。

「ヒカル...。」

「結婚して下さい。」

ヒカルがもう一度言った。

「...はい。」

桃が答えると、ヒカルはホッとした笑顔になって、桃を抱きしめた。

「一緒に、幸せになろう。」

「うん...。」

ヒカルの腕に包まれて、桃はまた泣いてしまった。

「泣き虫だな。もう少し強くなってもらわないとね。」

ヒカルが茶化すように言う。

「こういう時は泣いたっていいんですよ。」

「じゃあ、これで涙が止まるかな？」

そう言うと、ヒカルが桃にキスをした。

桃の体が、温かく優しい気持ちに包まれた。

愛する事、信じる事、あきらめない事。  
大切な人に教えてもらった大切な言葉。

新しい幸せを一緒に築いていこう。

甘くて、温かくて、キモチが落ち着くミルクティーのような幸せを。

完